

大阪府茨木市

平成7年度発掘調査概報

平成8年3月

 茨木市教育委員会



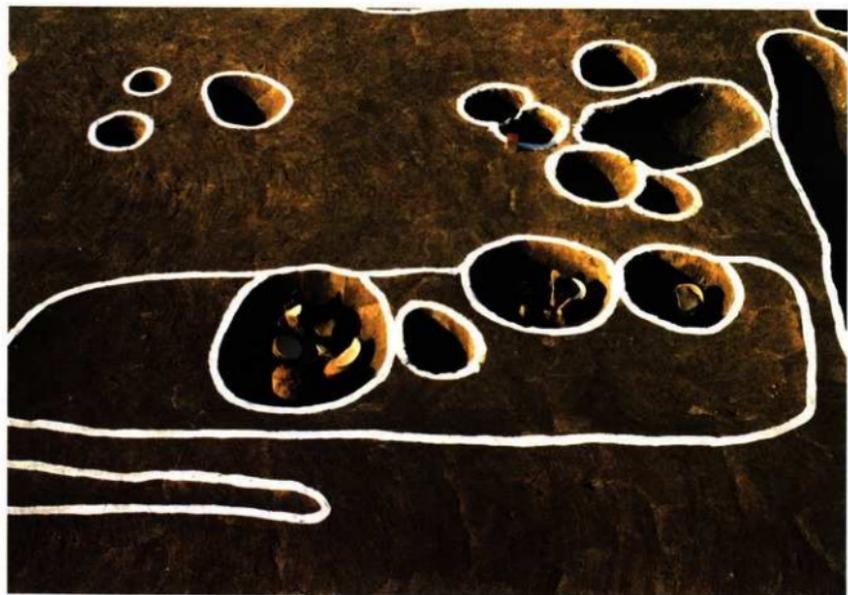
太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵（南から・叻大阪府文化財調査研究センター提供）



高槻市郡家今城塚古墳（西から・叻大阪府文化財調査研究センター提供）



舟木遺跡 調査地全景（北から）



舟木遺跡 SP-16・SP-17・SP-18 遺物出土状況（南から）

序 文

大阪府の北部に位置する茨木市は、古代から現代に至るまで三島地域の中核的都市として発展してきました。

また、埋蔵文化財をはじめとする様々な文化遺産が良好な形で残されています。茨木市教育委員会では、市内における開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を継続的に実施しており、これまでも数多くの貴重な成果をおさめています。

本年度は、太田北遺跡（太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周）や舟木遺跡などの発掘調査をおこないました。

なかでも今回報告書に取りあげる太田北遺跡と舟木遺跡は、最近新しく発見された遺跡であります。太田北遺跡は、近年活発にその真偽が論議されている継体天皇陵の外堤部にあたる地点であること、また、舟木遺跡は、すでに市街地になっている場所からの発見であり、従来は遺跡の存在が稀薄な地域として考えられていたものです。

今回の両遺跡の発掘調査成果は、周辺地域を含めて、本市域の歴史を構築する資料の一つとなり、またそれぞれの分野の研究に対しても貴重な資料として提供することができるものと考えております。

あとになりましたが、調査にあたり深いご理解と惜しみないご協力をいただきました関係の皆様へ深く感謝いたしますとともに、今後とも本市の文化財の保存・保護になお一層のご理解とご援助を賜りますようお願い申し上げます。

平成8年3月31日

茨木市教育委員会

教育長 村 山 和 一

例 言

- 1 本書は、茨木市教育委員会が主体となり平成5・6・7年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査概要報告である。
- 2 本報告書において取りあげる内容としては、太田北遺跡（太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周）・舟木遺跡の2遺跡である。この遺跡の調査期間・調査担当者・原因者・施工業者は、下記の通りである。

太田北遺跡（太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周）

第一次調査 平成5年9月6日～9月24日・中東 正之

学校法人藍野学園・熊谷組(株)・東海アナース(株)

第二次調査 平成7年7月20日～8月12日・濱野 俊一

学校法人藍野学園・西武建設(株)・安西工業(株)

舟木遺跡（FK・95-1）

平成7年9月6日～10月5日・濱野 俊一

寺田 種一・生和建設(株)・島山組(株)

- 3 現地調査及び内業整理にあたっては、調査補助員として下記の参加協力を得た。

藤田 昌宏 林 慎吾 森木 芳子 西坂 泰子

高瀬 隆治 西井 貞善 峯松 皓代

若林 純也 高田 裕弘 田中 良子

西澤 泰枝 高橋 公子

仁王 浩二 大戸井 和江

- 4 本書の作成・編集は、茨木市立文化財資料館長松本忠光、主査奥井哲秀の指導のもとに、濱野がこれにあたった。出土遺物の実測、各種図面の謄書、遺構、遺物の写真及び全体の編集については濱野が担当した。
- 5 現地調査及び内業整理にあたっては、下記の方々から種々のご協力、ご指導、ご教示を賜った。

免山 篤（茨木市文化財研究調査会委員）

森岡 秀人（芦屋市教育委員会）

森田 克行（高槻市埋蔵文化財センター）

古川 久雄（六甲山麓遺跡調査会）

秋山 浩三（財大阪府文化財調査研究センター）

永野 香（奈良大学考古学研究室OB）

藤田 明弘（花園大学考古学研究室OB）

- 6、本書に使用した地図は、『国土地理院発行—1/25, 000高槻・吹田』・『茨木市都市計画図—1/2, 500』である。また、各遺跡の地区割は、調査区にあわせて任意に設定した。また、標高はT・P（東京湾標準高）を使用している。

本文目次

序 文 例 言

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	8
旧石器時代	8
縄文時代	10
弥生時代	10
古墳時代	10
奈良時代	11
平安・鎌倉・室町時代～近世時代	11
第2章 太田北遺跡（太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周）の発掘調査	13
第1節 調査に至る経緯と経過	13
第2節 検出遺構と出土遺物	15
第3節 まとめ	20
第3章 舟木遺跡の発掘調査	21
第1節 調査に至る経緯と経過	21
第2節 検出遺構と出土遺物	22
第3節 まとめ	28

巻頭カラー図版目次

巻頭図版Ⅰ (上) 太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵 (南から) 大阪府文化財調査研究センター提供)

(下) 高槻市郡家今城塚古墳 (西から) 大阪府文化財調査研究センター提供)

巻頭図版Ⅱ (上) 舟木遺跡調査地全景 (北から)

(下) 舟木遺跡 S P-16・S P-17・S P-18 遺物出土状況

挿図目次

第1図 茨木市位置図

第2図 周辺遺跡分布図

第3図 太田北遺跡 (太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周) 発掘調査位置図

第4図 太田北遺跡 (太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周) 第1次調査地遺構面平面図・断面図

第5図 太田北遺跡 (太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周) 第2次調査地遺構面平面図

第6図 太田北遺跡 (太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周) 出土遺物実測図-I

第7図 太田北遺跡 (太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周) 出土遺物実測図-II

第8図 舟木遺跡発掘調査位置図

第9図 舟木遺跡遺構面平面図・断面図

第10図 舟木遺跡出土土器実測図

図 版 目 次

- 図版 1 (上) 太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵前方部拝所(東から)
(下) 落ち込み全景(南から)
- 図版 2 (上) 落ち込み S D-01 全景(南から)
(下) 落ち込み全景(東から)
- 図版 3 (上) 円筒埴輪出土状況(南から)
(下) 高槻市新池埴輪窯遺景(調査地より北東方向を望む)
- 図版 4 (上) 太田北遺跡第1次調査地全景(南から)
(下) 太田北遺跡第1次調査地全景(西から)
- 図版 5 太田北遺跡(太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周)出土遺物-I
- 図版 6 太田北遺跡(太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周)出土遺物-II
- 図版 7 太田北遺跡(太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周)出土遺物-III
- 図版 8 舟木遺跡調査地全景(西から)
- 図版 9 (上) 舟木遺跡調査地東半部全景(西から)
(下) 舟木遺跡調査地北西部全景(北から)
- 図版 10 (上) 舟木遺跡調査地西半部全景(西から)
(下) 舟木遺跡調査地南東部全景(北から)
- 図版 11 (上) S D-05・S P-16・S P-17・S P-18・遺物出土状況(南から)
(下) S D-05 遺物出土状況(北から)
- 図版 12 (上) S P-16・S P-17・S P-18 遺物出土状況(南から)
(下) S P-18 遺物出土状況(北から)
- 図版 13 (上) S P-16・S P-17 遺物出土状況(南から)
(下) S P-20 瓦器出土状況(西から)
- 図版 14 舟木遺跡(F K・95-1)出土土器-I
- 図版 15 舟木遺跡(F K・95-1)出土土器-II
- 図版 16 舟木遺跡(F K・95-1)出土土器-III

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境 (第1図・第2図)

大阪府の北部に位置している茨木市は、南北に長く面積は、76.51km²、人口は255,000人で三島地域の中核都市として発展している。大阪・京都・神戸を結ぶ日本の大動脈である東海道の一端に位置する機能性の高い大阪の衛星都市のひとつである。

周辺の市町としては、東に高槻市、南と南西に摂津市と吹田市、西と北西に箕面市と豊能町に隣接するとともに、北は京都府亀岡市に接している。

茨木市の地理的特徴は、大きく見て市域の北半分は、山地・丘陵で南半分は平野になっている北半分の山地は丹波高原の南端にあたり、標高300m前後の緩やかな隆起が準平原を形成しており、北摂山地と呼ばれている。これを形成している主な地層及び岩石は、丹波帯とよばれる古生層に属するチャートや砂岩、泥質岩や輝緑凝灰岩といった古い時代のものである。

北摂山地の樞部にかけては、砂礫や粘土で構成している大阪層群からなる丘陵地帯、低位段丘が発達している。また、西には前期洪積層の隆起地形である標高50～100m前後の千里丘陵がある。

南半分の平野は、淀川及び安威川・佐保川・勝尾寺川・元茨木川（現在廃川）などの市内を流れる主要河川によって形成された扇状地及び沖積平野が広がり、三島平野を形成している。

今回、報告する太田北遺跡（太田茶白山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周）は、標高20～30m前後の低位段丘上（富田台地）に立地している。また、舟木遺跡は、元茨木川（現在廃川）が形成した標高5～10m前後の沖積平野に立地している。この、舟木遺跡の周辺の大半は、既に市街地になっており、旧地形が判りにくいところも多いが、茨木市の南部地域は比較的条里地割が遺存しており、地形的な景観を特徴づけている。

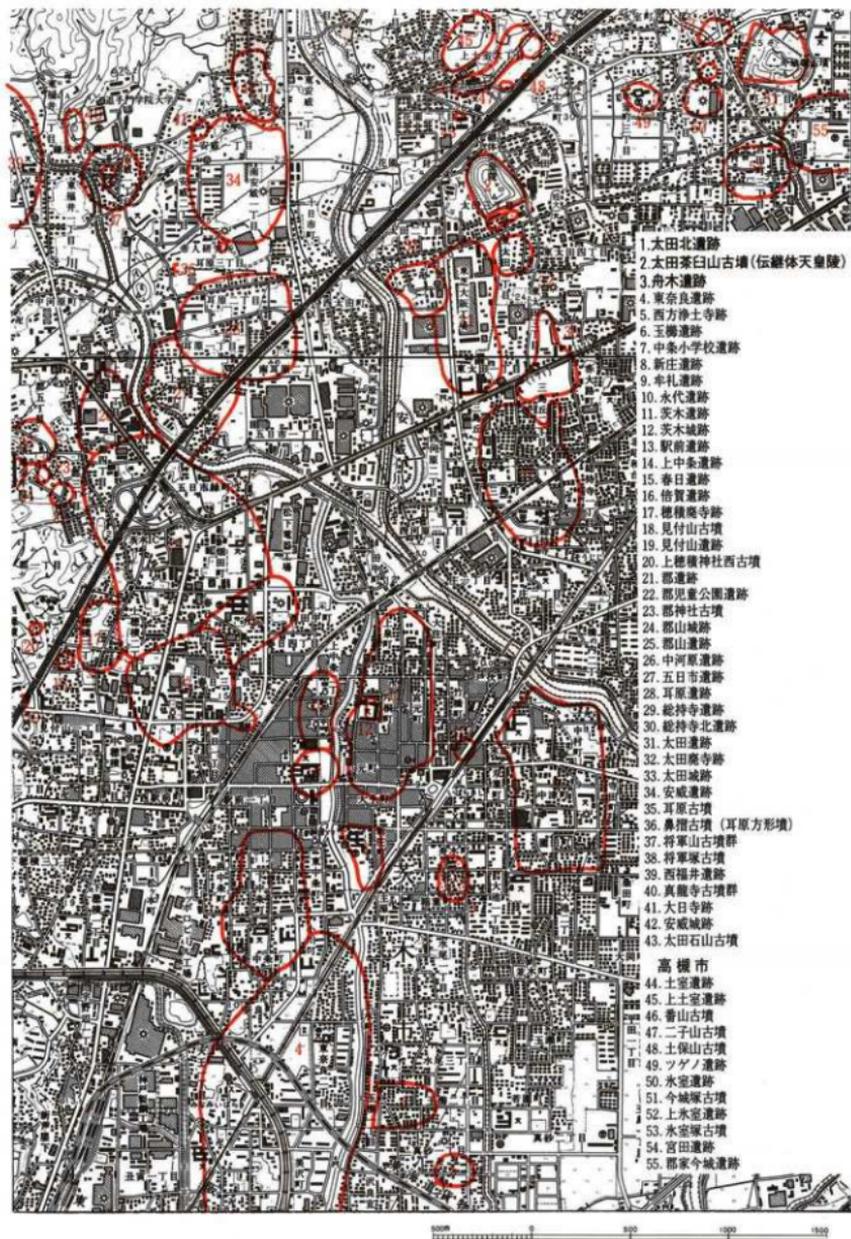
第2節 歴史的環境 (第2図)

旧石器時代の遺跡は、内容的には不明な点が多いながらも山麓部の初田遺跡、丘陵部裾の太田遺跡・耳原遺跡・郡遺跡等で表面採集や後世の遺物包含層から、ナイフ形石器・有舌尖頭器が単独又は数点発見されている。また、近年、東奈良遺跡においてもナイフ形石器が数点発見されている。

周辺地域では、高槻市の郡家今城遺跡において礫群や石器群が検出されている。他に塚原遺跡津之



第1図 茨木市位置図



第2図 周辺遺跡分布図

江南遺跡・郡家川西遺跡などからも、ナイフ形石器や有舌尖頭器が検出されており、安威川東岸を中心に旧石器時代の遺跡が検出されているのである。

縄文時代の代表的な遺跡としては、耳原遺跡がある。縄文時代後期から晩期にかけての遺構や遺物が検出されている。特に、晩期の滋賀里Ⅲ式期から長原式期までの甕（深鉢）棺墓が16基検出されている。また、安威川右岸の牟礼遺跡では、自然流路及び井堰・水田が検出され自然流路から若干の晩期（滋賀里Ⅲ式～Ⅳ式・船橋式もしくは長原式）の縄文土器が出土している。他に山麓部の初田遺跡や西福井遺跡・太田遺跡でも縄文土器が出土しており、東奈良遺跡においても、前期末（大蔵山式）爪形文（C字）土器や晩期後半（大洞AないしA'式）の浮線文土器と石棒が出土しているが、近年の発掘調査で晩期後半の船橋式と長原式の深鉢片が出土している。また、郡遺跡において石刀が出土しており、今後、縄文土器が出土する可能性が高いと思われる。

弥生時代のものとしては、前期の東奈良遺跡・日垣遺跡がある。また、前期末には、耳原遺跡・郡遺跡にも集落の形成が見られる。

特に東奈良遺跡は、高槻市安満遺跡と同じく、北摂地域における拠点集落であり、中期後半には、銅鐸鑄造等の発見により、青銅器生産をしていたことが判明している。

中期及び後期になると、市内の主要河川の両側及び丘陵部や山間部に新たな集落を形成するため遺跡数が急激に増加する。また、東奈良遺跡や郡遺跡などの拠点集落では、集落規模が大きくなり、近くに分村した遺跡も現れる。

新たに集落を形成する遺跡としては、見付山遺跡・春日遺跡・太田遺跡・溝畔遺跡や高地性集落である石堂ヶ丘遺跡などがあり、東奈良遺跡の分村として成立したものと思われるのは、中条小学校遺跡、そして郡遺跡の分村としては中河原遺跡・倍賀遺跡などがある。

古墳時代の遺跡には、北部の山麓部と千里丘陵の裾部に多くの古墳が築造される。前期古墳としては、紫金山古墳と將軍山古墳が相次いで丘陵部に築造される。両古墳とも全長約100m程の前方後円墳で、後円部中央には、竪穴式石室がある。後円部の竪穴式石室には断面U字形の粘土棺床をそなえ割竹形木棺があったと推定されている。特に、紫金山古墳の竪穴式石室からは、12面の鏡の他、貝製の鍬形石・車輪石・筒形銅器等の多種多様な副葬品が出土している。続いて前期末には、直径約10mの円墳である安威0号墳及び全長約45m程の前方後円墳の安威1号墳が築造される。両古墳とも、割竹形木棺をいれた粘土槨が2基検出されている。

中期にはいと、全長226m・後円部径138mの前方後円墳である、太田茶臼山古墳（伝継体天皇陵）が築造される。また、最近の発掘調査の結果、太田茶臼山古墳（伝継体天皇陵）に先行して築造されたことが判明した太田石山古墳がある。

後期にはいと、市内では最も早く横穴式石室を導入した青松塚古墳を初めとして南塚古墳、海北塚古墳が築造される。そして山麓部を中心に横穴式石室を主体とする、新屋古墳群・安威古墳群・將軍山古墳群・長ヶ瀬古墳群などの群集墳が出現する。また、大形単独墳である耳原古墳やカマド塚である上寺山古墳、後期末から終末期にかけての初田古墳・阿武山古墳が築造されている。

最近では、平地部の駅前遺跡・郡遺跡として段丘上に立地する総持寺遺跡などで、墳丘を削平された埋没墳が多数見つかり、主体部は、横穴式石室の痕跡が認められないため木棺直葬墳と考えられている。

古墳時代の集落跡としては、弥生時代から引き続いて存続する郡遺跡・倍賀遺跡・宿久庄遺跡・中条小学校遺跡などがある。特に東奈良遺跡では、古墳時代前期初頭にかけて再び集落規模が大きくなり、幅7～10mの大溝が掘られたり、多くの他地域の搬入土器が出土している。また、新たに成立した集落遺跡としては、上中条遺跡などがある。

奈良時代（律令時代）に入ると、茨木市を含め北摂地域は、嶋上郡・嶋下郡・豊嶋郡の3郡に分れ、茨木市域は嶋下郡に属するようになる。嶋下郡は、新屋・宿人（久）・安威・穂積の4郷からなり、嶋下郡衙は、旧山陽道（西国街道）沿いの郡あるいは郡山周辺地域にあったと推定されている。最近の発掘調査では、奈良から平安時代にかけての掘立柱建物跡などが検出されている。このため、今後、郡遺跡周辺において嶋下郡衙が発見される可能性が高いと思われる。

また、この地域を統率していた有力氏族の寺院としては、飛鳥時代末期から奈良時代にかけて創建された太田廃寺・穂積廃寺がある。特に太田廃寺からは、塔婆心礎及び舍利容器一具、そして榎子葉弁文軒丸瓦・忍冬唐草文軒平瓦などが出土している。その他に安威の大織冠山から単独で凝灰岩製の石櫃から三彩釉有蓋壺の蔵骨器が発見されており、平安前期にはいと、忍頂寺と総持寺が相次いで建立されている。

北摂地域は、古くから藤原氏の勢力の強い土地で、平安時代に入ると、茨木市域の多くは、摂関家の藤原氏の荘園であったことが文献から知られている。しかし、中世になると藤原氏の勢力が衰え、変わって荘園領主は、氏神・氏寺であった春日大社や興福寺に移り、両寺社による荘園支配が、室町時代（15世紀中頃）まで続いている上記の茨木市域の荘園の様子を示す遺構が最近の発掘調査によって検出されている。

特に近年、発掘調査が継続的に実施されている玉櫛遺跡において、平安時代後半から室町時代前半（14世紀）にかけての掘立柱建物跡や水田などが検出されている。そしてごく最近の発掘成果では、堀に囲まれた玉櫛地域の荘園領主クラスの屋敷跡が検出されている。

また、舟木遺跡に隣接している新庄遺跡においても、平安時代（9～12世紀）の河川や掘立柱建物跡や小型滑石製地鎮具が検出されている。

新庄遺跡で出土している特徴的な遺物としては、緑釉陶器や越州窯系青磁が出土している。特に、越州窯系青磁は一般集落跡からあまり出土せず、国府・郡衙・寺院などの公的施設跡か、平安京などの都城などから出土するのが通例で、茨木市域では郡遺跡について2例目となった。

また、宿久庄遺跡においては、9世紀後半から10世紀頃にかけての掘立柱建物跡と13世紀後半から末葉にかけての2時期にわたる掘立柱建物跡が検出されている。

そのほかには、郡遺跡・溝咋遺跡・東奈良遺跡においても平安時代から中世にかけての掘立柱建物跡や井戸などが検出されているが、点的調査のため集落構造が判明するまでには至っておらず今後、中世集落の発掘事例が増加することに期待したい。

上記の荘園などの集落遺跡以外ものとしては、茨木市の北部の山間部には、クルス山中世墓地や伏原中世墓地が点在しているとともに、忍頂寺や八幡神社の五輪塔や佐保の岩風呂などの中世石造品がある。

また、中世全般を通じて、山間部には泉原城や佐保城などの山城、平地部には、太田城や福井城が築造されている。

そして中世末から近世初頭にかけては、茨木川左岸に茨木城が築造され、特に、茨木城主、中川清秀・片桐且元は有名で戦国時代、茨木城の北に位置する芥川城・高槻城や西の池田城・有岡城（伊丹城）などとともに、北摂地域において重要な拠点的な城として歴史上存在した。

しかしながら、元和元年（1616年）の一國一城令により廃城になって以後は、現在まで本格的発掘調査を実施していないため、茨木城の正確な縄張りについても確実に解っておらず、現在も幻の城となっており、今後の発掘調査の成果に期待するところとなっている。

参 考 文 献

- 1 茨木市史
- 2 吹田市史・第1巻、第8巻別編
- 3 高槻市史・第1巻本編Ⅰ、第6巻考古編
- 4 箕面市史・第1巻
- 5 大阪府史・第1巻古代編Ⅰ
- 6 東奈良遺跡調査会「東奈良 発掘調査概報Ⅰ・Ⅱ」1979年・1981年
- 7 茨木市教育委員会「昭和60年度～平成3年度発掘調査概報Ⅰ・Ⅱ」
- 8 茨木市教育委員会「信賀遺跡発掘調査概要報告書－平成3年度発掘調査概報－」
- 9 茨木市教育委員会「葦分神社東方遺跡発掘調査概要報告書－平成6年度発掘調査概報Ⅱ－」
- 10 茨木市教育委員会「わがまち茨木－城郭編・古墳編－」
- 11 茨木市教育委員会「茨木の歴史と文化遺産」1986年
- 12 茨木市教育委員会「茨木の史跡」1983年
- 13 大阪府教育委員会「嶋上郡衙跡発掘調査概要」1971年
- 14 大阪府教育委員会「東奈良遺跡発掘調査概要Ⅰ・Ⅱ」1976年・1989年
- 15 大阪府教育委員会「玉櫛遺跡発掘調査概要」1992年
- 16 高槻市教育委員会「嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要Ⅰ～Ⅵ」
- 17 高槻市教育委員会「高槻市文化財年報、昭和61～平成6年度」
- 18 吹田市教育委員会「埋蔵文化財緊急発掘調査概報、昭和55年度～平成6年度」
- 19 如意谷遺跡調査団「如意谷遺跡」1982年
- 20 (財)大阪府文化財調査研究センター「溝昨遺跡現地説明会資料」1995年12・09
- 21 (財)大阪府文化財調査研究センター「玉櫛遺跡現地説明会資料」1995年12・09
- 22 大阪府教育委員会「新庄遺跡現地説明会資料」
第30回大阪府下埋蔵文化財研究会 松岡 良憲 「茨木市新庄遺跡の発掘調査」
- 23 寺沢薫・森岡秀人編「弥生土器の様式と編年（近畿編Ⅱ）」
森田克行「摂津地域」

第2章 太田北遺跡(太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周)の発掘調査

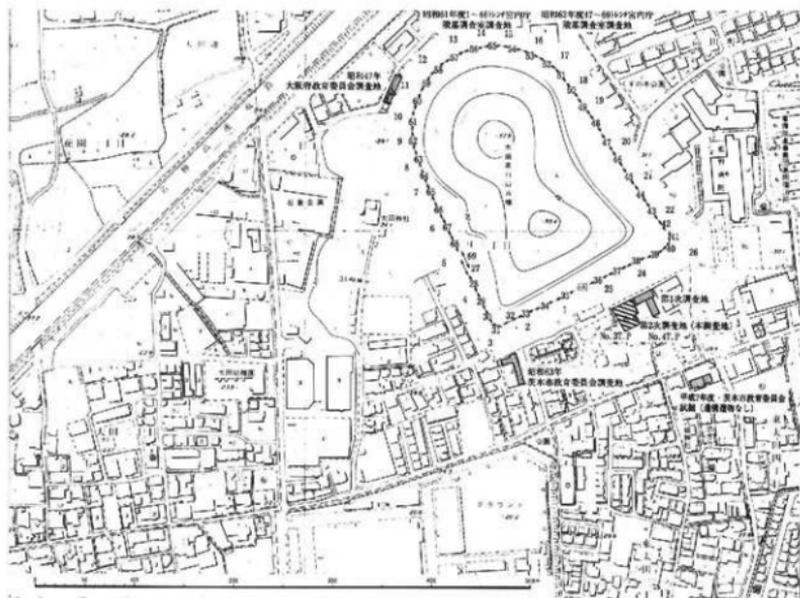
第1節 調査に至る経緯と経過

- 1 所在地 大阪府茨木市太田3丁目202-1
- 2 調査面積 170㎡・250㎡
- 3 調査原因 学校法人藍野医療技術専門学校寮建設
- 4 太田北遺跡(太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周)の既往の調査と調査に至る経過

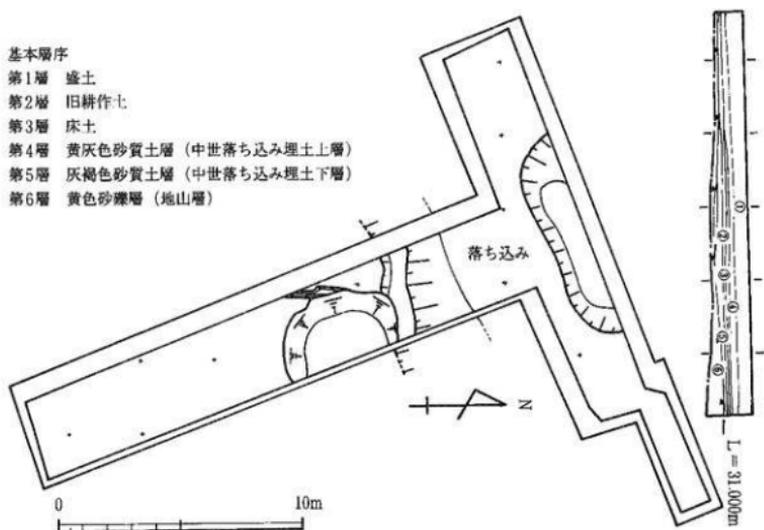
太田北遺跡は、平成5年6月の試掘調査によって発見された遺跡である。当該地周辺は、従来から太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部として周知されており、過去、大阪府教育委員会及び茨木市教育委員会によって、太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周を巡る埴輪列が調査検出されている。

しかしながら、早くから平坦地であった当該地は、太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周を巡る埴輪列と思われる痕跡は認められず、遺跡の残存状況等は不明であった。

平成5年9月に茨木市太田3丁目に所在する学校法人藍野医療技術専門学校内のグランド東半分において校舎建設が計画された。当該地は前述の通り太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周南東部(前方部拝所前庭の東側)にあたり、埴輪列の痕跡等の遺構の存在が予想された。このため、埋蔵文化財確認依頼に基づき校舎建設予定地内において試掘調査を実施した結果、太田茶臼山古墳・伝継体



第3図 太田北遺跡(太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵、外堤部外周)発掘調査位置図



第4図 太田北遺跡 (太田茶臼山古墳継体天皇陵外堤外周) 第1次調査地構構平面・断面図

天皇陵外堤部外周を巡る埴輪列はまったく検出されず、中世の瓦器・土師器片を含む遺物包含層を確認するにとどまった。上記の結果を踏まえ、太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵が築造された古墳時代中期よりも中世を中心とする遺物が検出されたため太田北遺跡として新たに周知の埋蔵文化財包蔵地となった。

この試掘調査において、確認された中世の遺物包含層は、北側に設定した試掘壕のみしか検出できず、他の試掘壕においては、盛土・旧耕作土直下から地山層である黄色砂礫層が露出し、遺構遺物等はまったく検出されなかった。

このため、試掘調査の結果をもとに依頼者と茨木市教育委員会とが協議を重ね、本調査は、北側に設定した試掘壕を中心にT字状にトレンチを設定し、当該地における中世の遺構・遺物等の広がりを確認することとなった。(第1次調査 第3図・第4図)

調査の結果、当該地北側に中世の落ち込みを検出し、多数の埴輪片と古墳時代後期の須恵器や中世の瓦器・土師器などが出土した。そして、当該地南側に巡ると思われていた埴輪列は、近世の水田開発と近年の造成工事によって削平・消滅していたことが判明した。

その後、当該地の西半分に残っていたグラウンドにおいて平成7年6月に学校法人藍野医療技術専門学校寮建設が計画され、第1次調査で検出された落ち込みの続きと埴輪列の残存状況を確認するため再び、埋蔵文化財確認依頼に基づき寮建設予定地内において試掘調査を実施した結果、第1次調査で検出された落ち込みの続きを確認した。

この試掘調査の結果をもとに依頼者と茨木市教育委員会とが協議を重ね、平成7年7月20日より本格的な発掘調査を実施することとなった。(第2次調査 第3図・第5図)

5 調査の方法

調査にあたっては、協議の結果、中世の落ち込みが確認された学校寮建設予定地の北半分を中心に、茨木市立太田地区公民館建設に伴う発掘調査で検出された埴輪列の推定ラインまでを対象とした調査は、現地表下約1mまでの分厚い盛土層と旧耕作土層は重機で掘り下げ、以下は人力掘削及び精査を実施した。

また、調査にあたっては調査区に合せた任意の地区割を設定し、遺物取上げ及び測量のため3m×3mグリッドで調査をすすめた。

第2節 検出遺構と遺物

1 基本層序

調査区において普遍的に見られる下記の6層を基本層序とした。以下各層について概説する。

第1層 盛土（学校法人藍野医療技術専門学校付属グラウンド建設時の造成土）

第2層 旧耕作土（学校法人藍野医療技術専門学校付属グラウンド以前の水田土壌）

第3層 床土（学校法人藍野医療技術専門学校付属グラウンド以前の水田床土）

第4層 黄灰色砂質土層（中世落ち込み埋土上層）

第5層 灰褐色砂質土層（中世落ち込み埋土下層）

第6層 黄色砂礫層（地山層、富田段丘礫層）

2、遺構と遺物

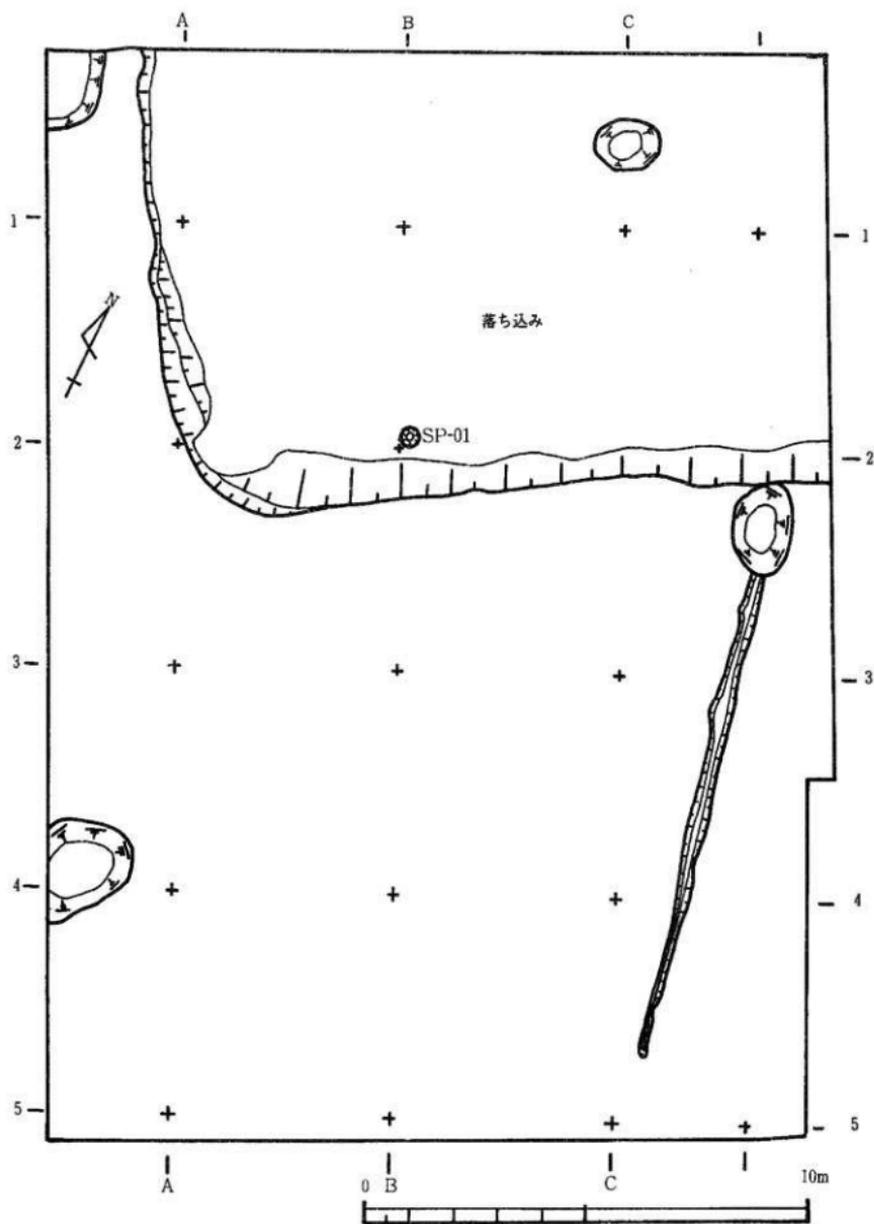
今回の調査の結果、地山層直上において中世の落ち込みを検出した。この落ち込み以外は、近世の溝（SD-01）と杭跡のみである。また、期待された埴輪列は、第1次調査と試掘調査時に確認された通り近世の水田開発と近年の造成工事によって削平・消滅していたことが判明した。以下、中世の落ち込みの検出状況と出土遺物について概説する。

検出遺構（第5図）

落ち込み

調査区の北端において検出した中世後半の浅い落ち込みである。検出できたのは、南端と西端のみで、北側は宮内庁管理の太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵の敷地に延びている。また、第1次調査においても落ち込みの南端を検出しており、東に延びていることもあわせて確認されているためこの落ち込みは、東西に長い溝状を呈するものと思われる。（第4図）検出幅の最大は、南北で3mで深さは平均20cmを測る。落ち込みの埋土は、黄灰色砂質土と灰褐色砂質土の2層で多くの円筒埴輪片と古墳時代後期の須恵器そして中世の瓦器・土師器・須恵器や備前焼などの中世国産陶器や火鉢などの瓦質土器などが地山層に接する形で出土した。

また、この落ち込みから出土した円筒埴輪の多くが口縁部から胴部にかけての破片が多く、底部付近の破片が少ないのが特徴である。このことから、落ち込み形成時期には、まだ、埴輪列が良好に残存していた可能性を示すものと思われる。



第5図 太田北遺跡（太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵・外堤部外周）第2次調査地構構平面図

出土遺物（第6図～第7図・1～21）

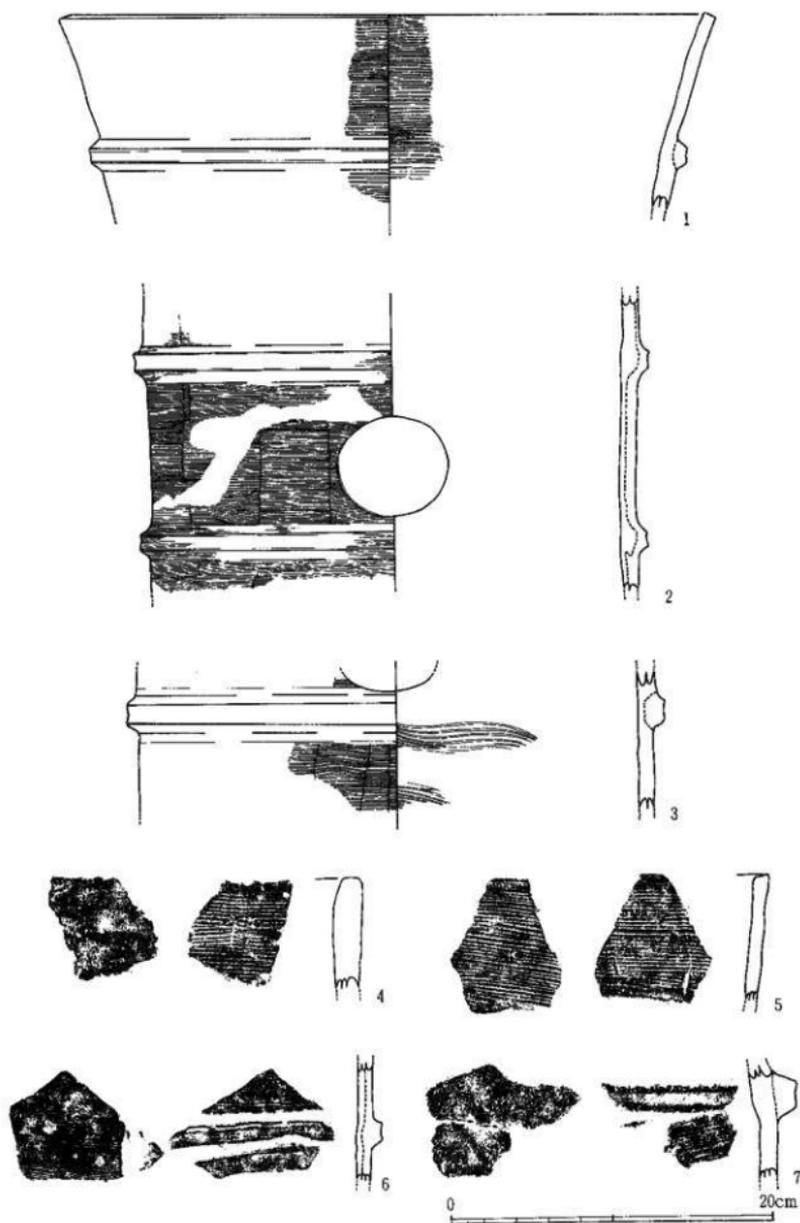
出土遺物は、中世の落ち込みからの出土がほとんどで、しかも、遺物の残存状況も悪く、すべてが破片であり完形品は全くない。このため、第1次調査において落ち込みからの出土遺物と今回の調査で出土した遺物をあわせて記述することにする。

(1)～(11)は、第1次調査において落ち込みからの出土した土師質及び須恵質の円筒埴輪片である。(1)は口縁部と一段目の突帯部分の破片である。内外面にヨコハケ調整を施す。(2)及び(3)は、円筒埴輪の胴部で、円形のスカシ孔と突帯部分の破片である。外面にB種ヨコハケを施す。(4)と(5)は須恵質円筒埴輪の口縁部の破片で内外面にヨコハケを施す。(6)～(11)は突帯部分を中心にした破片である。(11)の須恵質円筒埴輪をのぞいて、土師質円筒埴輪で、内外面にヨコハケ調整を施す。

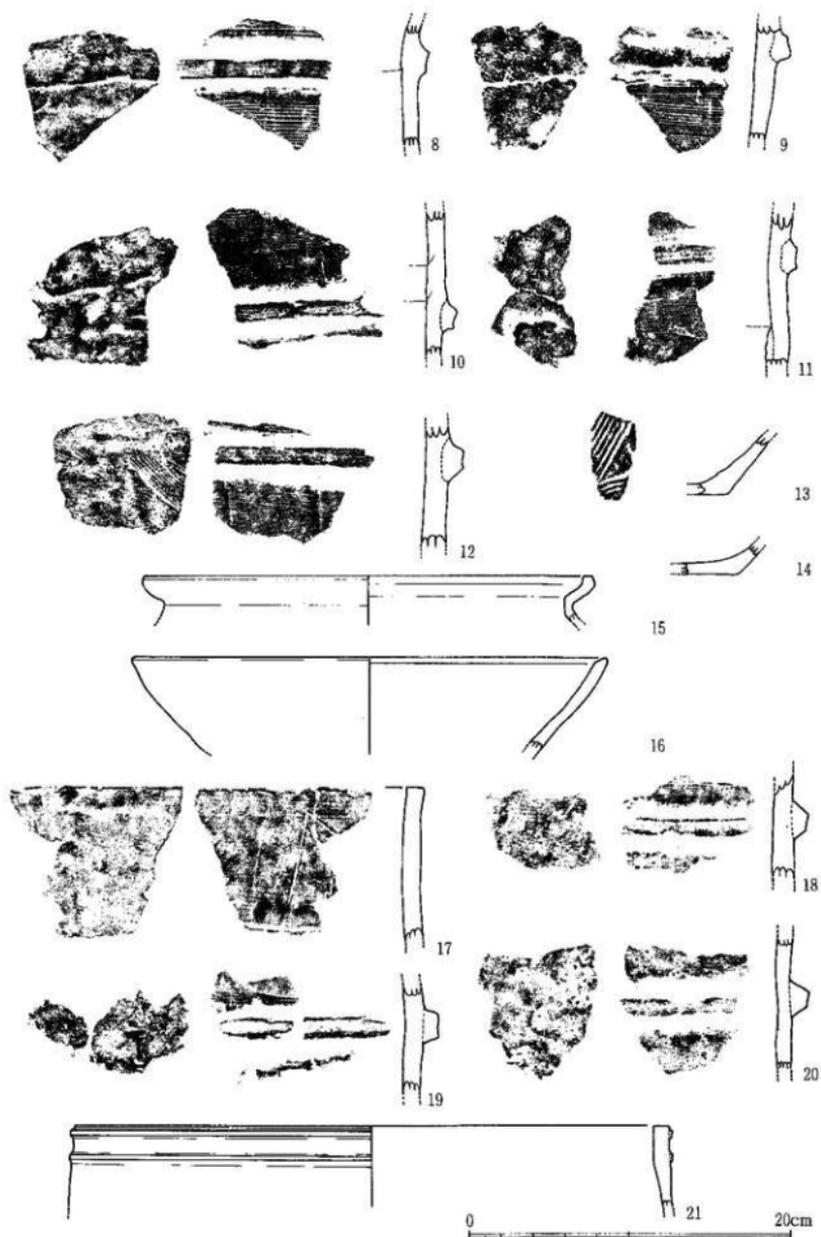
(13)～(16)は、第1次調査において落ち込みからの出土した中世後半の土器である。

(13)は、瓦質の摺鉢の底部で摺目を残す。また(14)は、東播系須恵器の摺鉢の底部片であり、底部外面には回転糸切り痕を残す。(13)は、瓦質の壺の破片であり、受け口状の口縁部を呈する。口径27・8cmを測る。(13)は、瓦質の鉢の口縁部の破片である。口径29・4cmを測る。

(17)～(20)は、第2次調査において落ち込みからの出土した円筒埴輪片である。特に、(17)は、須恵質円筒埴輪の口縁部片で三角状のヘラ記号を残す。内外面にヨコハケ調整を施す。(18)～(20)は突帯部分を中心にした破片である。(18)の須恵質円筒埴輪以外は土師質円筒埴輪で内外面にヨコハケを施す。(21)は、第2次調査において落ち込みからの出土した瓦質の火鉢である。



第6図 太田北遺跡 (太田茶臼山古墳 伝継体天皇陵外堤部外周) 出土遺物実測図-I



第7図 太田北遺跡（太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周）出土遺物実測図一Ⅱ

第3節 まとめ

太田北遺跡は、太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵の外堤部外周の調査の主体となる所から、中世の落ち込みが検出されたことにより、新たな遺跡として周知されることとなった。

今回の調査で判明した点を考察をまじえながら列記すると下記のごとくなる。

(1) 今回、調査によって判明した特筆すべき点としては、太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵の南側外堤部外周において、一部を除いて埴輪列が残存していないこと。そして本来、外堤部外周を取り巻いていた埴輪列は、中世の段階で大半が破壊されていることが判明した。

このことを考察すると、永祿年間に織田信長が近くに陣を構えたことなどが文献にでてくことや、近隣には太田城も存在している。また、近年の史跡整備のために調査されている高槻市郡家今城塚古墳が三好長慶によって中世城郭に改造されていることが判明している。これらの事実から太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵も中世後半段階に中世城郭に利用されたり、陣構えのために埴輪列が破壊されるほどの改変がおこなわれた可能性があることを指摘しておきたい。特に、今回、検出された落ち込みから瓦質土器など中世後半などの遺物が目立つこと、そして落ち込みの形状が東西に長い溝を呈することからなんらかの防御施設であった可能性を示唆しておきたい。

(2) 今回、出土した埴輪は、5世紀中頃から後半(川西編年Ⅳ期)の埴輪であり、このことは、これまでも、昭和47年8月の大阪府教育委員会の後円部北西外庭部調査、昭和61年5月の宮内庁書陵部が行った外堤改修工事に伴う事前調査や昭和63年7月の茨木市教育委員会が太田地区公民館建設に伴う事前調査によって太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵の前方部南西外堤部外周を巡る埴輪列が確認されているおり、すべての埴輪が5世紀中頃から後半(川西編年Ⅳ期)に収まっている。

特に近年、発掘調査された高槻市新池埴輪窯の調査は画期的であり、新池埴輪窯(A群窯)で生産された埴輪が太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵に供給されていたことが判明している。

しかしながら、現在、宮内庁管理下にある太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵については、墳丘内の具体的な内容が不明に近く、今後も外堤部外周の調査をすることが太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵の内容を知る重要な手掛りとなるものと思われる。

以上のように、今回の調査は、現在の太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵の真疑論争を含めて、三高地域における太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵の位置づけに関する資料のひとつを示すことができたと思う。

註1) 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号

註2) 土生田純之1988「三嶋藍野陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第39号

註3) 茨木市教育委員会1988「茨木市立(仮称)第10地区公民館建築に伴う発掘調査現地説明会資料」

註4) 高槻市教育委員会1933「新池」

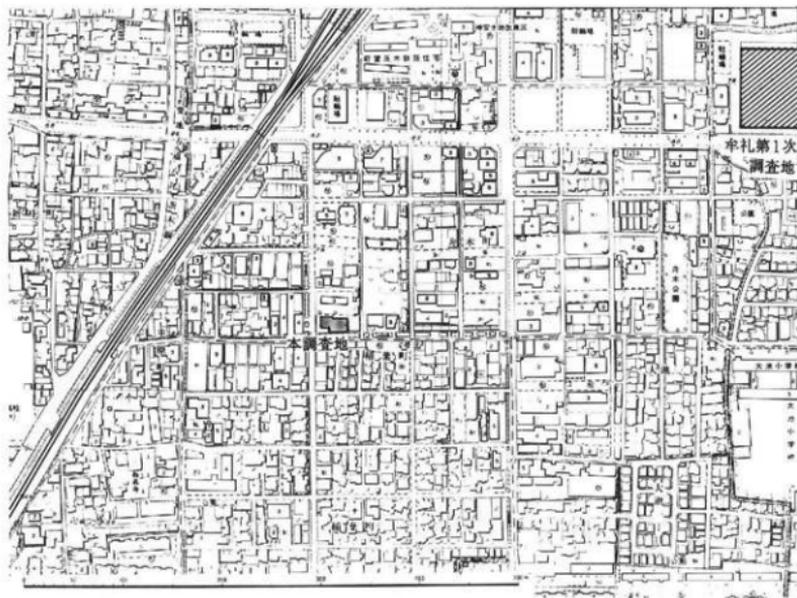
第3章 舟木遺跡の発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過

- 1 所在地 茨木市舟木町537-1
- 2 調査面積 約350㎡
- 3 調査原因 共同住宅建設
- 4 舟木遺跡の既往の調査

舟木遺跡は、平成7年7月31日に共同住宅建設に伴う試掘調査によって新たに発見されたものである。今回の調査地点周辺は、早くから市街地化していたので遺跡の存在が不明で、長らく遺跡の空白地帯となっていた所である。しかしながら、最近の市街地再開発に伴う発掘調査によって、遺跡の埋没深度の深い沖積地から相次いで弥生時代から中世にかけての集落遺跡の発見が続いている。

特に、昭和60年に発見された牟礼遺跡は、元茨木川の左岸の沖積地に位置し、舟木町に隣接する中津町・園田町を中心に広がる複合遺跡で、茨木教育委員会の調査によって自然流路に作られた井堰及び水田が検出されている。この自然流路から若干の縄文時代晩期の土器（滋賀里Ⅲ～Ⅳ式・船橋式・長原式）が出土している。このため、同井堰及び水田は縄文晩期の所産と考えることもでき



第8図 舟木遺跡、発掘調査位置図

きるが、出土土器が少量であるうえに、自然流路という古い時代の遺物が入りやすい状況と井堰そのものの構造が縄文時代晩期の所産にしては立派すぎるといふ意見もあり、現状では詳細が不明なことから、今後、周辺地域の調査結果を待って検討していく余地を残している。

また、平成3年度に大阪府教育委員会が試掘調査を実施して発見された新庄遺跡も、近年まで遺跡の空白地帯となっていた場所から検出されたものの一つである。新庄遺跡も元茨木川の左岸に位置し、弥生時代前期から中世・近世までの遺構・遺物が検出されている。特に、新庄遺跡で検出された平安時代を中心とした3時期にわたる遺構は、今回、検出された舟木遺跡の遺構と時期が重なるものも多く、距離的にも比較的近接しているため、新庄遺跡と舟木遺跡は、平安時代中期から後期にかけては一帯のものであったと考えることができるので、このことから元茨木川の左岸に大きな集落が存在していたことが判明した。

5 調査に至る経過

茨木市舟木町において、共同住宅の建設が計画された。当該地は前述の通り、従来まで周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内ではなかったが、敷地面積が500㎡を越えるため開発指導要綱にもとずき、埋蔵文化財確認の試掘調査を平成7年7月31日に行ったものである。

試掘調査は、敷地内の中央部西側に試掘坑を設定した。敷地の現状は駐車場である。試掘調査の結果、試掘坑から中世の遺物包含層と柱穴を確認した。この試掘調査の結果をもとに、依頼者と茨木市教育委員会とが協議を重ね、平成7年9月6日から本格的な発掘調査を行ない、平成7年10月12日に現地調査を終了した。

6 調査の方法

調査にあたっては、協議の結果、共同住宅建設予定地のうち基礎掘削で破壊される共同住宅本体部分のみに限定し、試掘調査で検出された中世の遺物包含層と遺構を重点的に調査を実施することとした。調査は、盛土・旧耕作土・床上層を重機によって掘り下げ、排土は、本体工事の関係と敷地の狭さから盛土等については重機掘削時に場外処理をおこない、人力掘削による遺物包含層と遺構の排土は場内処理となった。また、調査にあたっては、調査区に合せた任意の地区割を設定し、遺物取上げ及び測量のため3m×3mグリッドを設定して調査を行なった。

第2節 検出遺構と出土遺物

1 基本層序（第9図）

調査区の東壁において普遍的にみられる下記の7層を基本層序とした。以下各層について概説する。ただし、今回は、基礎掘削で破壊される部分に調査を限定したため、第7層以下にも堆積層あり、一部、試掘坑の深掘部分において、庄内式併行期の遺物を若干含む層や無遺物層の洪水堆積層を確認している。そして、遺跡の立地が沖積地という性格上、本来の地山層までは確認していない。

第1層 盛土（駐車場建設時の造成土）

- 第2層 旧耕作土（駐車場建設以前の水田上壤）
- 第3層 淡灰黄色砂質土層（駐車場建設以前の水田床土）
- 第4層 淡黄褐色砂質土層（近世～中世遺物包含層）
- 第5層 灰褐色砂質土層（中世遺物包含層）
- 第6層 淡灰茶色砂質土層（中世遺物包含層）
- 第7層 黄茶色砂質土層（平安時代後期から中世の遺構面）

2 遺構と遺物

今回の調査の結果、平安時代後期から中世の遺構面が確認できた。検出した遺構としては、溝8条、土壇5基、柱穴多数であった。柱穴のなかには、複数の土師皿を埋納したものもあり、地鎮遺構と思われる。以下、主要な遺構についてのみ検出状況と出土遺物について概説する。

検出遺構（第9図）

SD-01

調査区の中央部から西部において検出した東西溝である。溝幅は平均40cm、深さ約15cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物は、瓦器碗、土師皿が出土している。また、この溝直上において、白磁碗を検出した。（第10図、33）

SD-05

調査区南東部で検出された南北溝である。溝幅は平均70cm、深さ約15cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物は、黑色土器B類碗・楠葉型瓦器碗、「て」の字状口縁の土師皿などが出土している。

SP-16（地鎮遺構）

調査区南東部で検出したピットである。直径は約40cm前後、深さは21cmを測り、埋土は暗灰褐色砂質土である。ピット内から完形の土師皿などが出土している。

SP-17（地鎮遺構）

調査区南東部でSP-16と並んで検出したピットである。直径は約40cm前後、深さは21cmを測り、埋土は暗灰褐色砂質土である。ピット内から完形の「て」の字状口縁の土師皿などが出土している。

SP-18（地鎮遺構）

調査区南東部で検出したピットである。SP-16とSP-17からは、やや離れたピットであるが、同じ船底状を呈する土壇内で検出した。直径は約60cm前後、深さは21cmを測り、埋土は暗灰褐色砂質土である。ピット内からは、完形の「て」の字状口縁の土師皿などを中心に楠葉型瓦器碗、土師質塼などが出土している。

その他の土壇及び柱穴

調査区全域で多数の柱穴を検出したが、掘立柱建物として明確に建つものは一棟もなかった。しかしながら、調査区の東側に柱穴が集中していることから、複数時期の掘立柱建物が数棟の掘立柱

建物として建っていたものと推定できるが、今回は、敢えて掘立柱建物や横列として復元しなかった。また、土壌の多くが、断面が皿状を呈する浅いものであり、出土遺物も少なく性格が判りにくいものが多い。

出土遺物 (第10図)

出土遺物は、SD-05とSP-17・SP-18を中心にまとめて土器が出土している。出土した土器の多くが、若干の白磁碗などの輸入陶磁器や土師質の埴などをのぞいて、ほとんどが、黒色土器B類碗・楠葉型瓦器碗、「て」の字状口縁の土師皿で占められている。このため図化は上記の遺構が中心で、その他の遺構からの出土遺物については、主要な遺物のみしか取り上げていない。また、包含層の出土遺物については、中世前半期の土器が多いが、細片が多く測図できた資料は少ない。

SD-05出土の遺物 (第10図-1~15)

(1)~(3)は、楠葉型瓦碗である。平均口径15cm、平均器高5cm前後を測る。内外面に細かいヘラミガキを密に施す。また、口縁部内面には一本の沈線を施す。特に、(3)は全体的に摩滅が著しく内外面のヘラミガキは不明である。

(4)~(5)は、黒色土器B類の碗である。平均口径15cm、平均器高6cm前後を測る。口縁部外面はヨコナデ調整を施す。

(6)は、土師器の甕である。口径24cm前後を測る。口縁端はつまみ上げて面を持つ。内外面ともヨコナデ調整を施す。

(7)は、土師器の埴である。口径36cm前後を測り、「く」の字に曲がる口縁部と外面に若干の縦方向の粗い刷毛目調整を施す。内面は、ナデ調整を施す。

(8)~(14)は、小型の土師皿である。典型的な「て」の字状口縁部を呈する(11)及び(14)そしてやや退化した「て」の字状口縁部を呈する(8)・(9)・(13)などとともに、ゆるやかに外反する口縁部を呈する(10)・(12)などが一緒に出土している。平均口径10cm、平均器高2cm前後を測る。

(15)は、中型の土師皿である。ゆるやかに外反する口縁部を呈し、口径15cm、器高2・7cmを測る。口縁部外面はヨコナデ調整を施し、口縁端部は丸く収める。

SP-17出土の遺物 (第10図-16~21)

(16)は、楠葉型瓦碗である。口径15cm、器高5cm前後を測る。外面下半に指頭圧痕が認められ、内面には、細かいヘラミガキを密に施す。また、口縁部内面には一本の沈線を施す。

(17)~(21)は、小型の土師皿である。SD-05出土の土師皿と同じく、典型的な「て」の字状口縁部を呈する。(20)そして「て」の字状口縁部の折曲げが鈍い(17)・(18)と口縁端部をつまみ上げるが、全体的に口縁部が鈍い(19)・(21)などが一緒に出土している。平均口径10cm、平均器高2cm前後を測る。

SP-18出土の遺物 (第10図-22~31)

(22)は、楠葉型瓦碗である。口径16cm前後を測るが、全体的に歪んでいるため正確な口径と傾きはわかりにくい。内外面には、細かいヘラミガキを密に施す。また、口縁部内面には一本の沈

線を施す。

(23)～(25)は、中型の土師皿である。坏形態を残す(23)や底部に回転糸切り痕を残す(24)などがある。全体的にゆるやかに外反する口縁部を呈し、口縁端部は丸く収める。

(26)～(31)は、小型の土師皿である。典型的な「て」の字状口縁部を呈する(27)や(28)そしてゆるやかに外反する口縁部を呈する(30)などがある。平均口径10cm、平均器高2cm前後を測る。

SP-19出土の遺物(第10図-32)

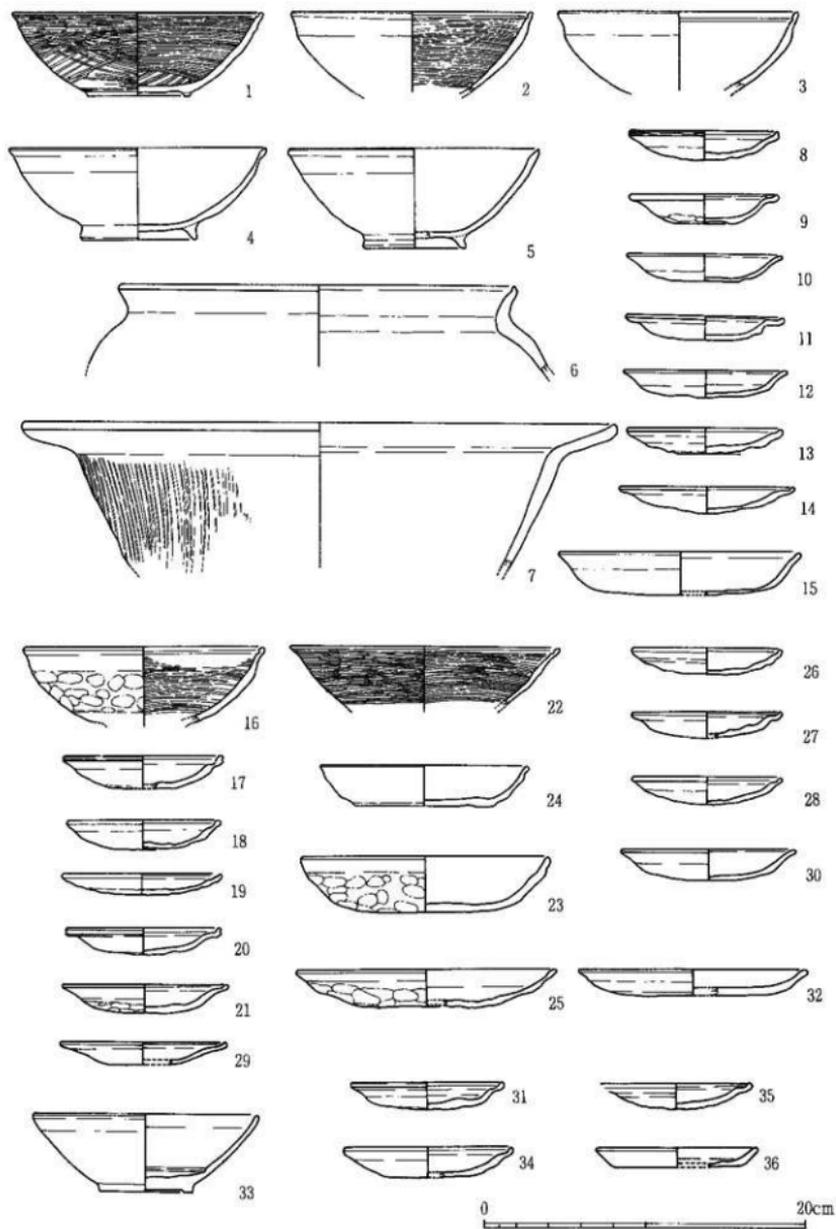
(32)は、中型の土師皿である。全体的にゆるやかに外反する口縁部を呈し、口縁端部は丸く収める。口径14cm、器高1・6cm前後を測る。

包含層及び遺構面直上の出土の遺物(第10図-33～36)

(33)は、白磁碗である。口径13・8cm、器高4・8cmを測り、縁端部は丸く収め、内面下位に一本の圈線が巡る。高台は削り出しで露胎になっている。内面下位に一本の圈線が巡る。

(34)～(36)は、小型の土師皿である。(35)は、典型的な「て」の字状口縁部を呈する。

(34)は口縁端部はつまみ上げるが全体的に折曲げが鈍い。口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。口径10cm、平均器高2cm前後を測る。



第10圖 舟木遺跡出土土器実測図

第3節 まとめ

今回の調査は、新しく発見された遺跡のため、確認調査の色合いが強い。特に茨木市内において平安時代中期以降中世にかけての集落遺跡の調査例は近年、増加しているが、今だ集落構成を知り得る程度の考古学的知見に乏しく、今後の調査の増加と資料の蓄積を待たなければならない状況下にある。しかしながら、確認調査の色合いが強い調査であっても、実態が不明であった元茨木川左岸における平安時代後期から中世前半にかけての遺跡の一端を知ることができた。今回の調査で判明した2～3の成果と問題点を以下に箇条書きにして、まとめたい。

1、今回の調査地点では、平安時代後期から中世前半にかけての遺構面と包含層を確認した。そして、調査の関係上、一部であるが試掘坑を掘り下げて下層には庄内式併行期の土器を包含する層と時期は不明だが、複数の水田面そして洪水堆積層を確認することができ、下層にも確実に遺構面と包含層が存在することが判明した。

今回、中心となる遺構としては、溝と柱穴を主体としており、井戸や墓などは検出できなかったが、確実に集落の一部を検出することができた。特に、調査区南東部に遺構が集中しており、西へ移るほどに遺構の数は減少する。このことは、遺物包含層も同様で、東から西へ向かって遺物量が少なくなり細片が多くなる。上記の結果から集落の中心が調査地南東方向に広がっていると思われる。

2、舟木遺跡の遺跡としての広がりとしては、従来を試掘調査の結果と今回の調査成果そして近接する遺跡からある程度の範囲を考慮することができる。遺跡の中心としては、前述の調査地南東方向を中心に舟木町と稲葉町東側半分そして、大池1丁目の一部にかかる範囲を考えたい。また隣接する牟礼遺跡と新庄遺跡も時代によって一帯のものとして考えることができるが、遺跡の空白地帯も多く、詳細な遺跡の範囲は、今後の周辺地域の調査事例の増加を待って検討してみたいと思う。

3、出土遺物としては、SP-17・SP-18の様な「て」の字状口縁土師皿の一括資料やSD-05から出土した黒色土器B類碗と楠葉型瓦器碗を中心とする遺物群は、北摂地域における平安時代後期（11世紀中頃）の集落における遺物構成を知る資料となった。特に、溝という一括性に乏しい遺構からではあるが、SD-05から出土した黒色土器B類の土器は、全体的に摩滅しており、ヘラミガキ等の調整は判別しにくい、坏形態の黒色土器B類を含まず、碗形態のみの黒色土器B類で構成されていることから比較的時期が限定できる資料と思われる。また、楠葉型瓦器碗の方もヘラミガキ調整を密に施すタイプで器高も高く、茨木市域では報告例の少ない瓦器出現期の良好な資料となるものと思われる。他に出土遺物として注目したいのは、輸入陶磁器のうち、白磁碗の出土量が多く、一部、白磁皿以外はほとんどが白磁碗で占められていた。このことは、葦分神社東方遺跡においても同様で、淀川北岸地域における輸入陶磁器の流通や時期的な多寡について今後の検討課題となった。

4、茨木市内においての平安時代中期以降中世全般にかけての集落の動向については、前述の通り、最近の発掘調査でおぼろげながら様相が判明してきた。各遺跡の消長を略述すると下記の通りとなる。

平安時代中期から鎌倉時代前半にかけては、いままで点的にしか明確な遺構形成をしていなかった元茨木川左岸に点在する舟木遺跡・新庄遺跡・玉櫛遺跡・葦分神社東方遺跡において集落存在が確認できるようになる。また、従来から知られている東奈良遺跡・中条小学校遺跡においても前代から引続いて集落形成をおこなわれ、安威川左岸の溝咋遺跡及び須賀神社境内遺跡そして勝尾寺川左岸の宿久庄遺跡でも集落が認められる。この時期は、茨木市域にも各荘園が成立し、扇状地や微丘地以外あまり積極的に開発が行われなかった沖積地に本格的な開発が行われたことと一致する。

また、北部山麓地域にかけては、平安前期創建の忍頂寺を中心に積極的に荘園開発が始まる時期にあたり、富田段丘上では同じく平安前期創建の総持寺を中心に集落が形成される。

鎌倉時代後半から室町時代前半にかけては、元茨木川左岸の舟木遺跡・新庄遺跡・玉櫛遺跡・葦分神社東方遺跡において集落規模がもっとも拡大する時期で、特に、13世紀後半にもっとも発展する。そして、安威川左岸の溝咋遺跡においても集落規模が拡大し、新たに目垣遺跡・真砂遺跡でも集落形成をおこなわれ、総持寺遺跡・郡遺跡・中河原遺跡・宿久庄遺跡や東奈良遺跡・中条小学校遺跡においても前代から引続いて集落が存続する。鎌倉時代後半から室町時代前半にかけてはほぼ市内平地部全域に集落が展開することとなる。北部山麓地域にかけては、本格的な発掘調査を実施されていないが、圃場整備に伴って瓦器・土師器等が採集されており、特に、鎌倉時代後半から室町時代前半にかけての五輪塔・宝篋印塔などの中世石造品が存在することから、馬場・佐保・泉原などでは、ほぼ集落形成ができあがっているものと考えたい。また、14世紀の南北朝時代の動乱以降北部山麓地域を中心に山城や砦が築かれるようになる。

室町時代後半から近世初頭にかけては、発掘調査事例が少なくはっきりとした集落の様相がつかみにくいが、現在の集落の景観はほぼこの時期に成立したものとおもわれる。特に応仁の乱以降、14世紀から16世紀後半段階には、茨木城を中心に太田城・三宅城・安威城などの本格的な中世城郭が形成されるが、本格的な調査事例が少なく今後の課題となっている。

以上のように、舟木遺跡の発掘調査で判明した成果の概要と茨木市域の平安時代中期から中世にかけての集落の動向を略述したが、舟木遺跡をはじめとして、まだまだ平安時代中期以降の茨木市域における遺跡の実態が判明しておらず、今後とも北摂地域という比較的に広い範囲で様相解明を検討してみたい。

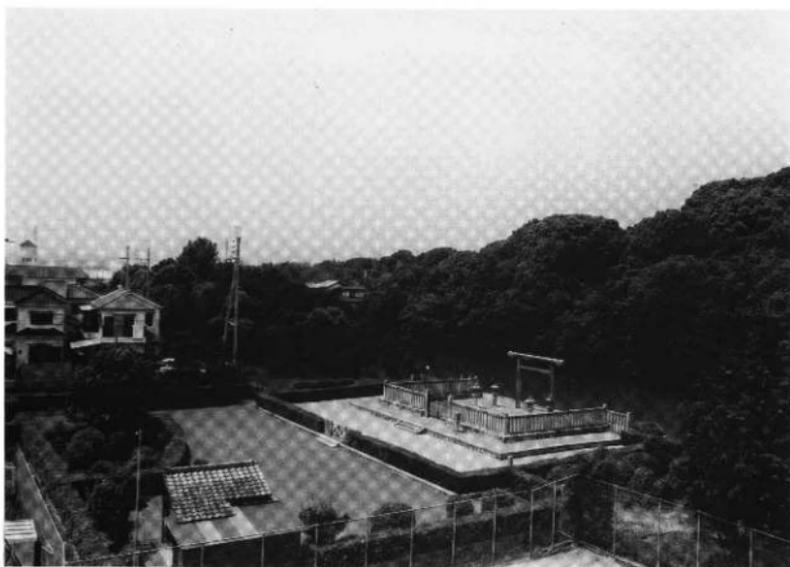
註1) 舟木町の北西部にて最近、試掘調査を実施したが遺構・遺物は検出されなかった。

註2) 三島在住の考古学研究者である免山 篤氏が精力的に遺跡踏査の結果、北部山麓地域(馬場・佐保・泉原地域)の遺跡の様相が判明してきており、今回の概報作成にあたり、氏の多くの御教示を得た。

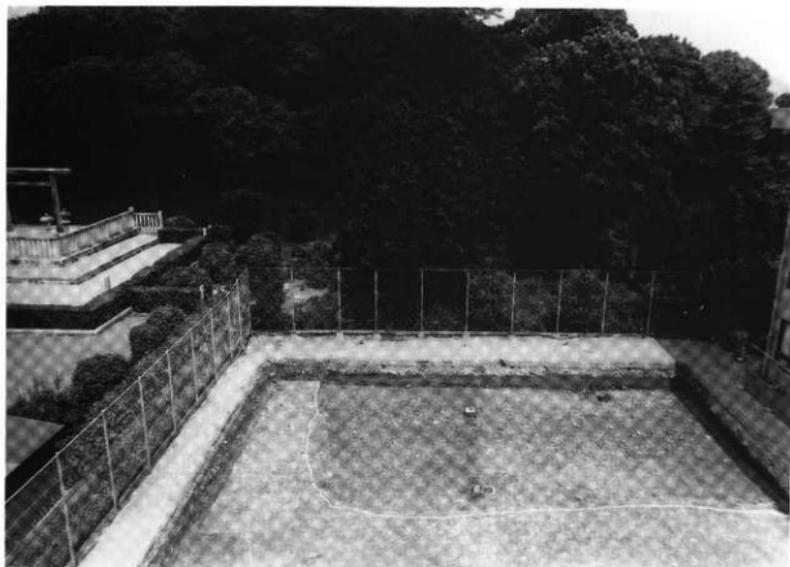
報告書抄録

ふりがな	おおさかふいばらきしへいせいななねんどはくつちようさがいほう							
書名	大阪府茨木市平成7年度発掘調査概報							
編著者名	濱野 俊一							
調査主体	茨木市教育委員会							
編集機関	茨木市教育委員会・茨木市立文化財資料館							
所在地	〒567大阪府茨木市駅前3丁目8番13号							
発行年月日	平成8年(西暦1996年)3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		東経	北緯	調査期間	調査面積	調査原因
太田北遺跡 (太田茶臼山古墳・伝 継体天皇陵外 堤部外周)	茨木市太 田3丁目 202-1	市町村	遺跡番号	135° 34'	34° 50'	1993.09.06 ~09.24	170m ² 及び25	専門学 校舎及び 学校寮建 設地
		272116	106	35° 35"	25° 25"	1995.07.20 ~08.12	0m ²	
舟木遺跡	茨木市舟木 町537-1	272116	116	135° 34' 41"	34° 48' 35"	1995.09.06 ~10.05	350m ²	共同住宅 建設地
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
太田北遺跡(太 田茶臼山古墳・ 伝継体天皇陵外 堤部外周)	古墳 散布地	古墳時代中 期後半・中 世後半		落ち込み		円筒埴輪・形 象埴輪・須恵 器・瓦器・瓦 質土器		新遺跡・太 田茶臼山古 墳前方部東 側外堤埴輪 列は消滅
舟木遺跡	集落	平安時代後 期前半から 中世前半期		溝・土壇・ 柱穴		黒色土器B 類埴輪・瓦器 埴輪・土師皿		新遺跡・11 世紀中頃の地 鎮遺構を検出

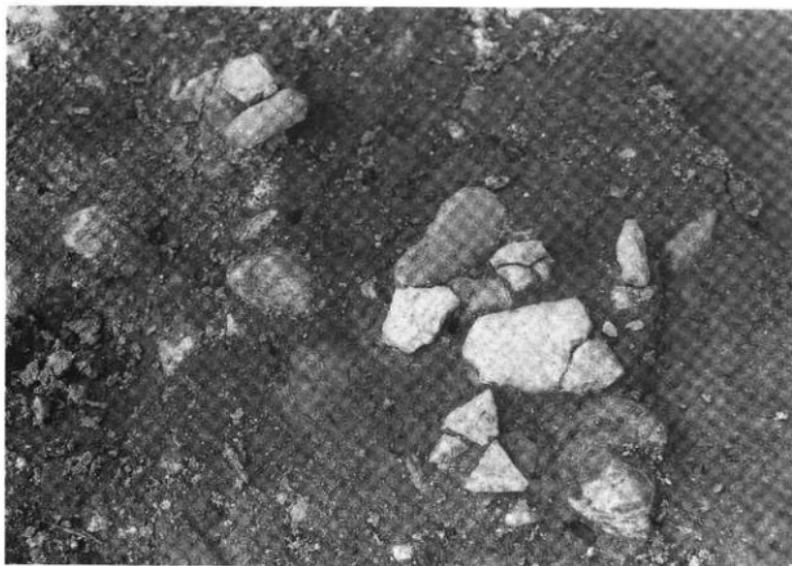
图 版



太田茶臼山古墳・伝繼体天皇陵前方部拝所（東から）



落ち込み全景（南から）



円筒埴輪出土状況（南から）



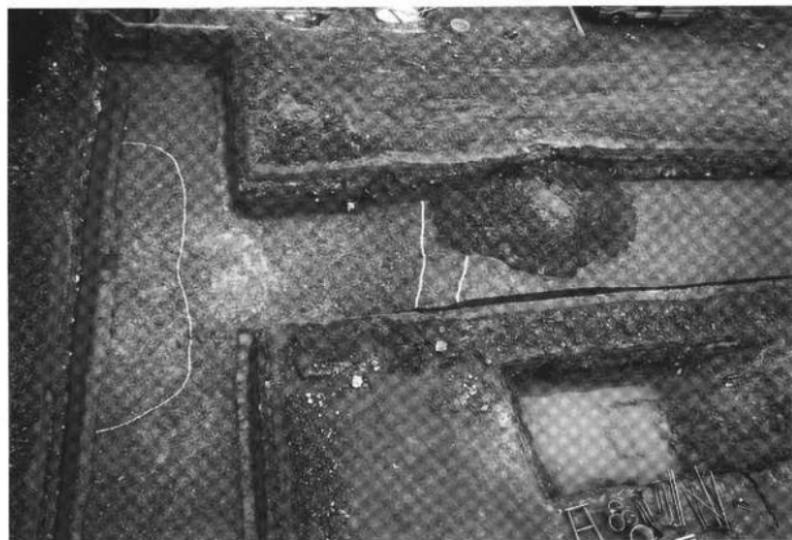
高槻市新池埴輪窯遠景（調査地より北東方向を望む）

太田北遺跡（太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周）

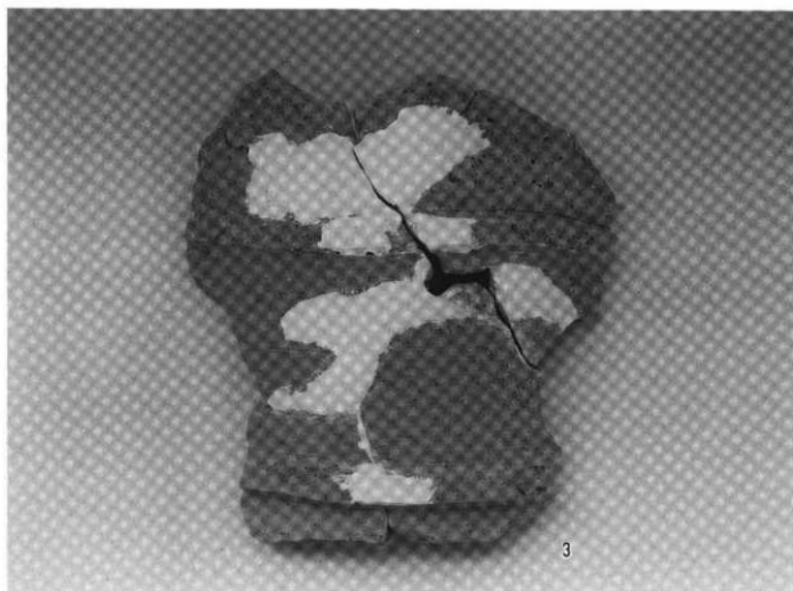
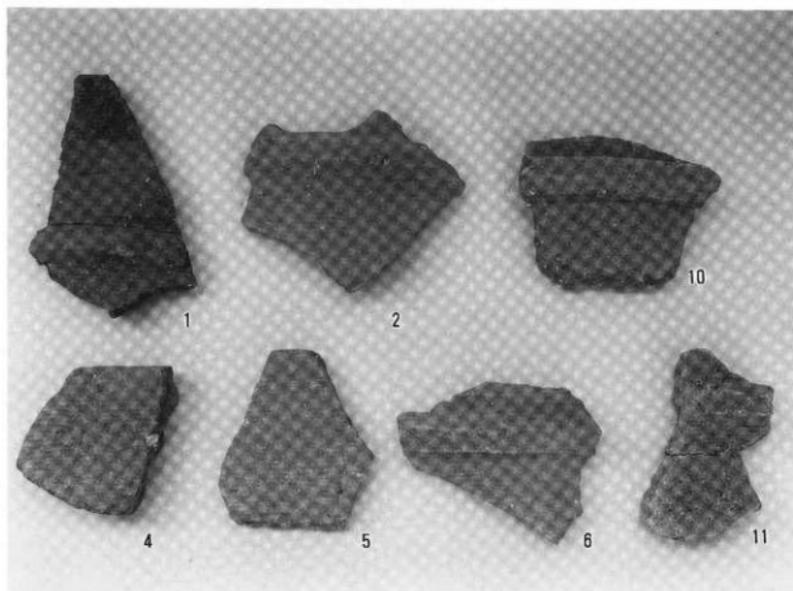
図
版
4



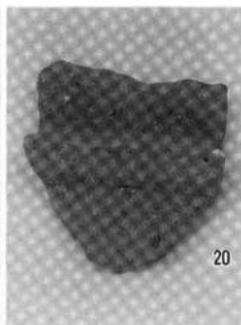
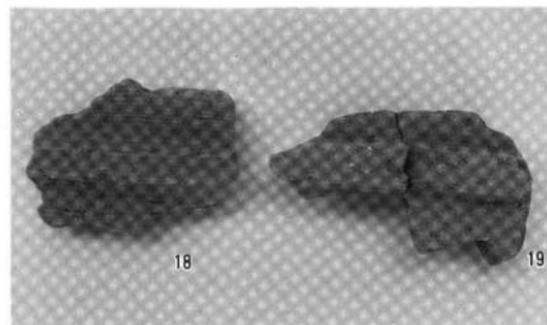
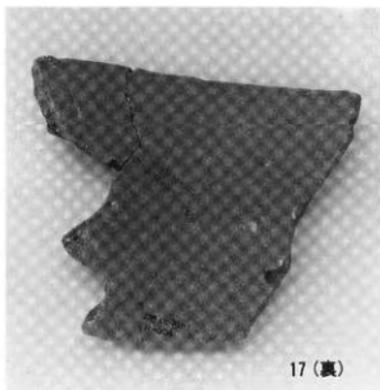
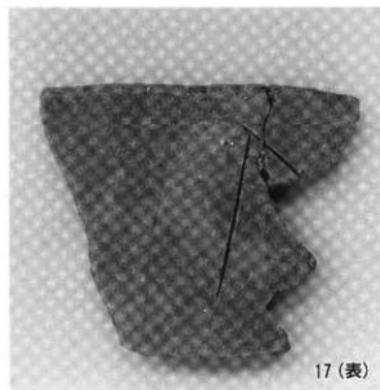
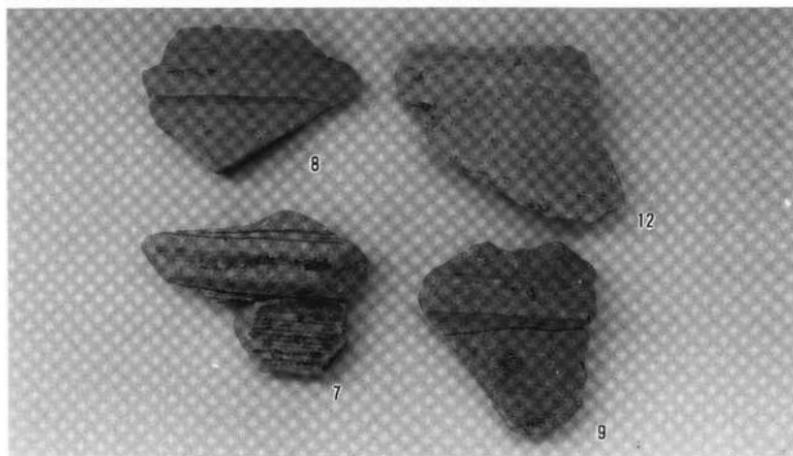
太田北遺跡第1次調査地全景（南から）



太田北遺跡第1次調査地全景（西から）



太田北遺跡（太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周）出土円筒埴輪・土器-I



太田北遺跡（太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周）

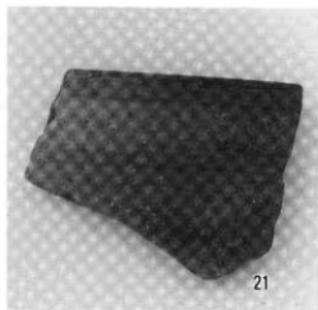
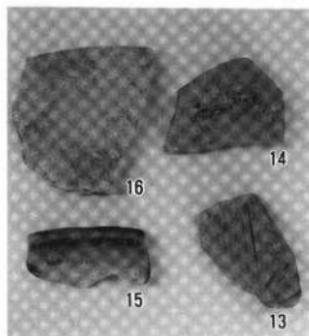
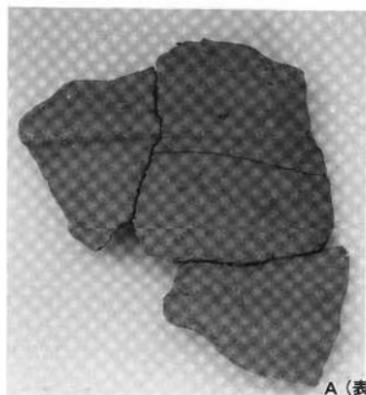
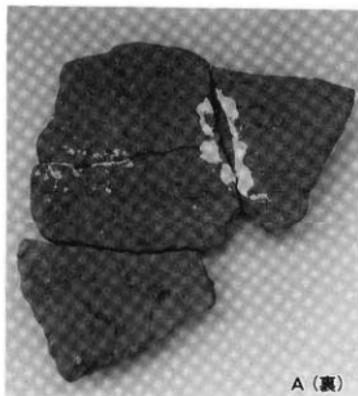


図
版
7

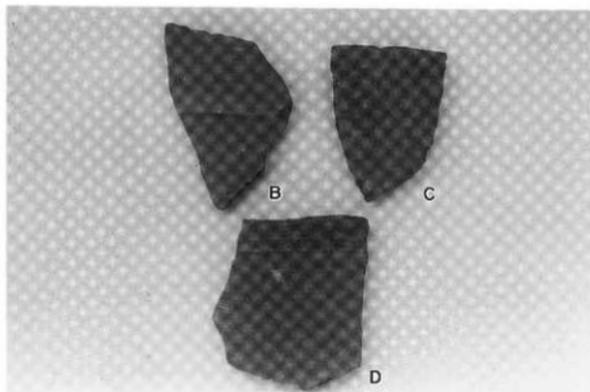


A (表)



A (裏)

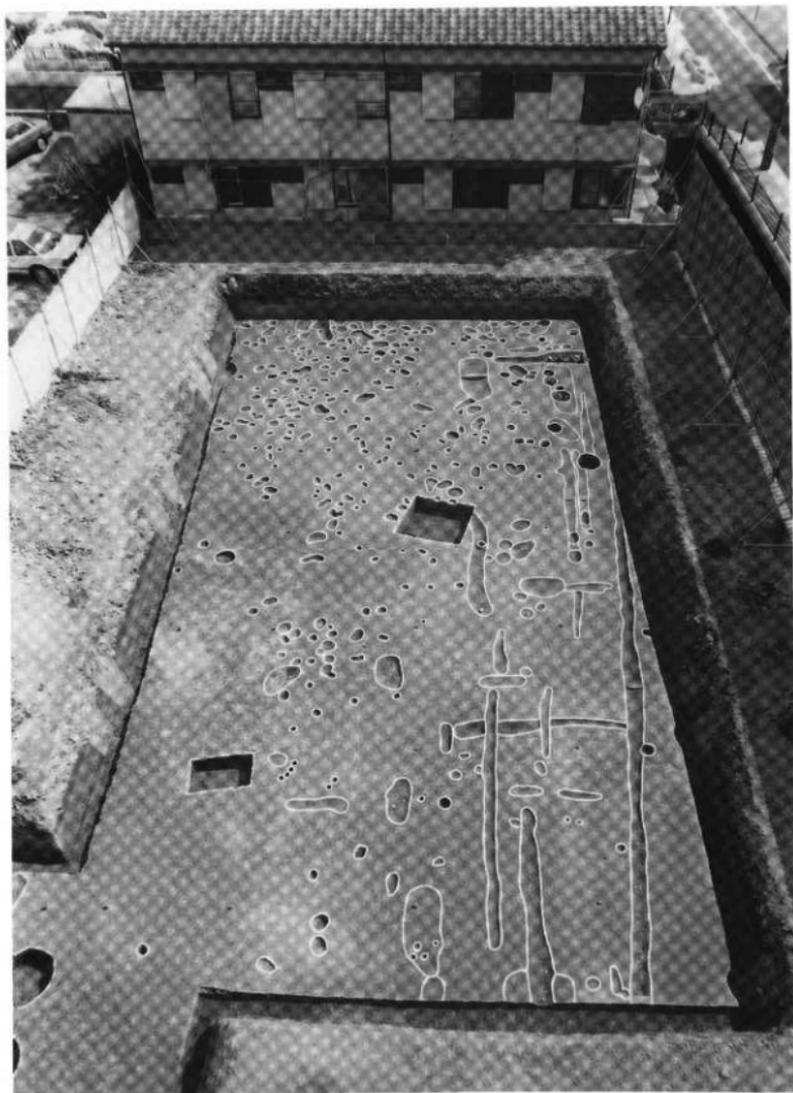
免山篤氏採集円筒埴輪A～D（太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵後円部北西外堤部外周にて）



太田北遺跡（太田茶臼山古墳・伝継体天皇陵外堤部外周）出土円筒埴輪・土器Ⅲ

舟木遺跡 (FK-95-1)

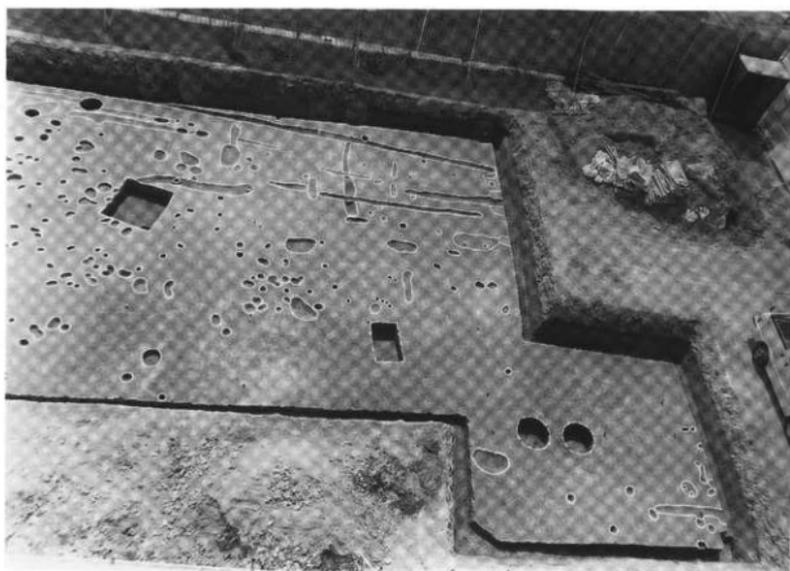
図
版
8



調査地全景 (西から)



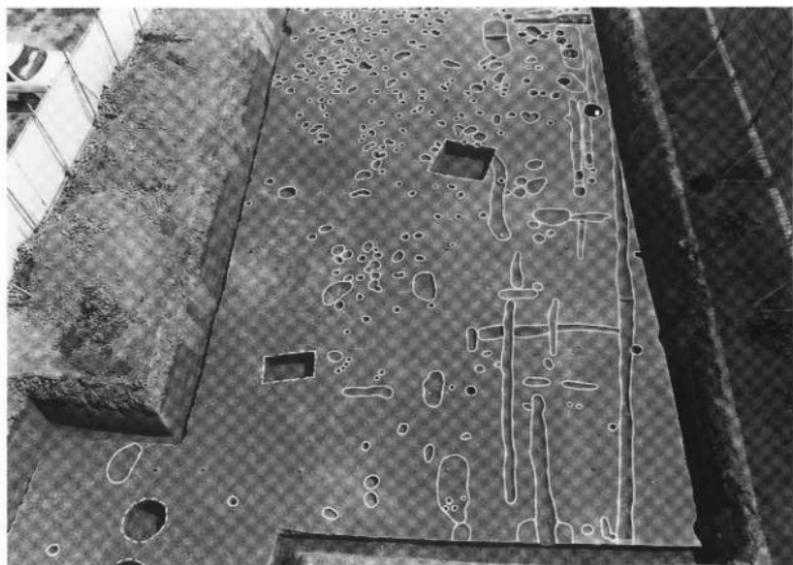
調査地東半部全景 (西から)



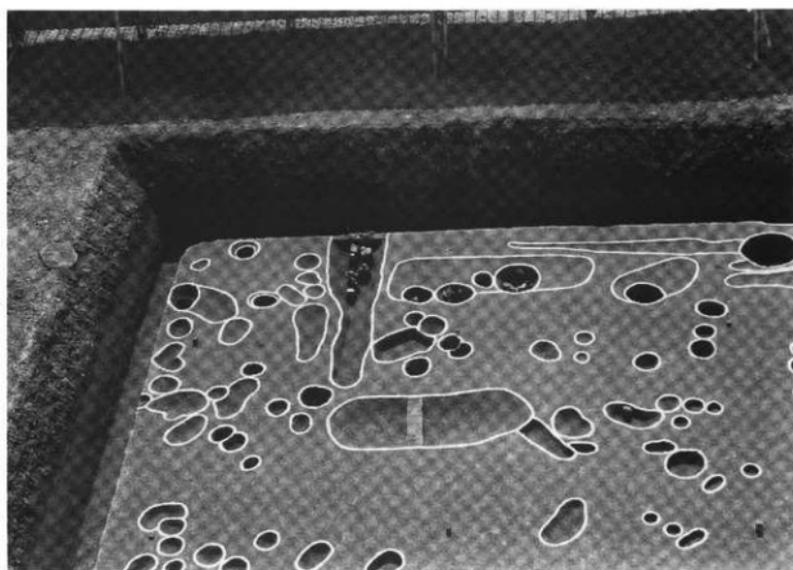
調査地北西部全景 (北から)

舟木遺跡 (FK-95-1)

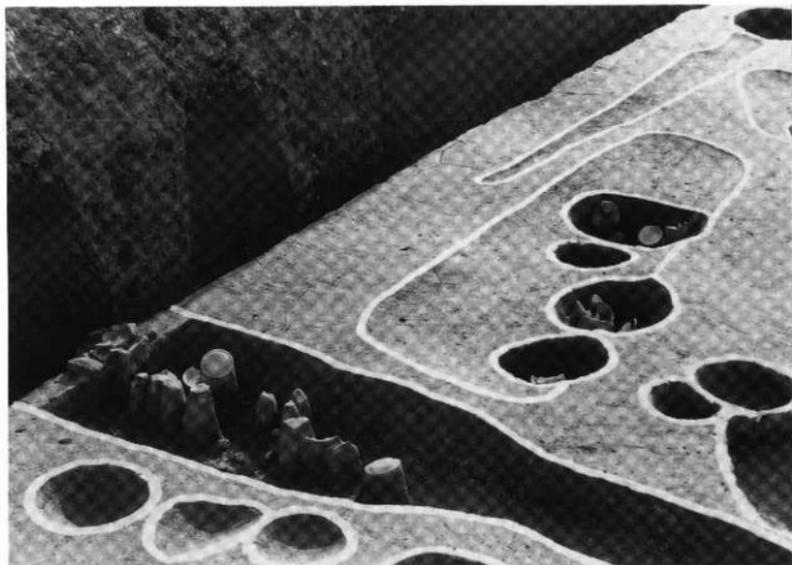
図
版
10



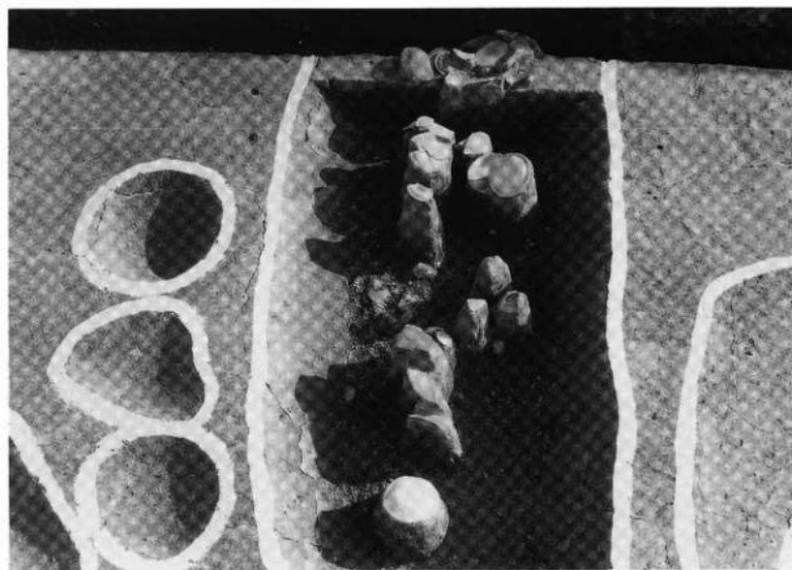
調査地西半部全景 (西から)



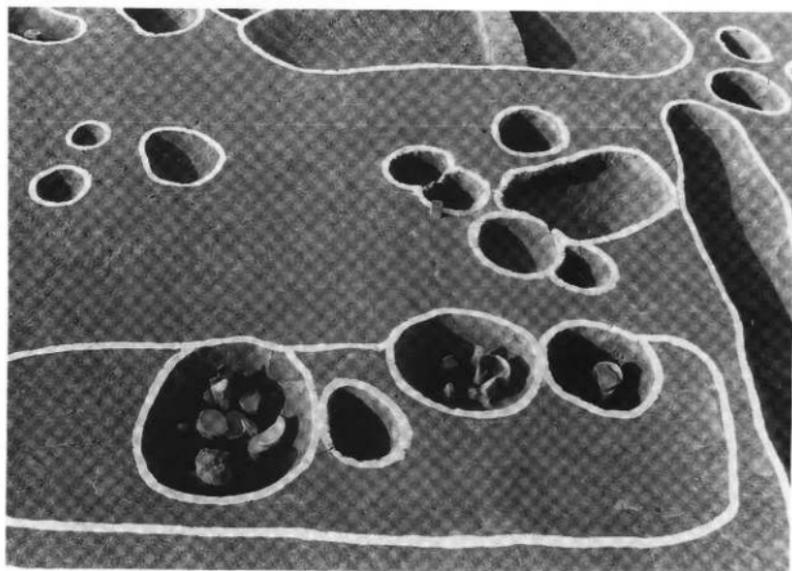
調査地南東部全景 (北から)



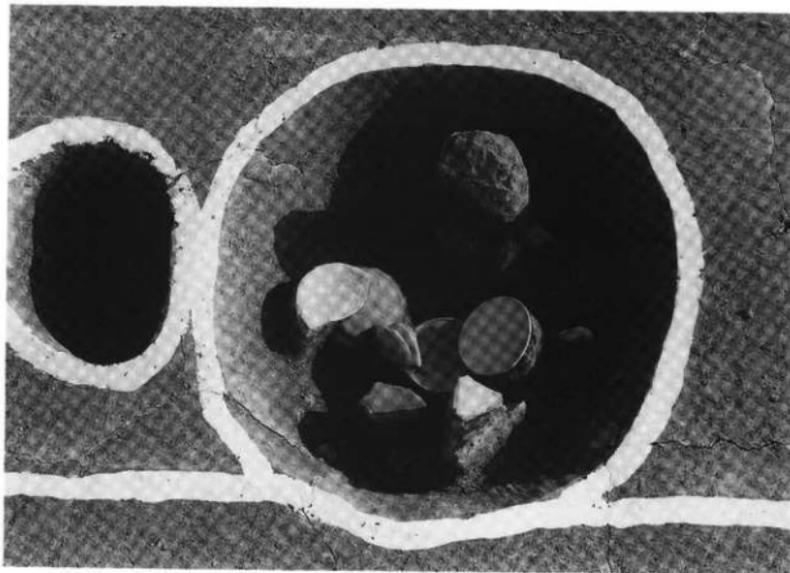
SD-05、SP-16、SP-17、SP-18遺物出土状況（東から）



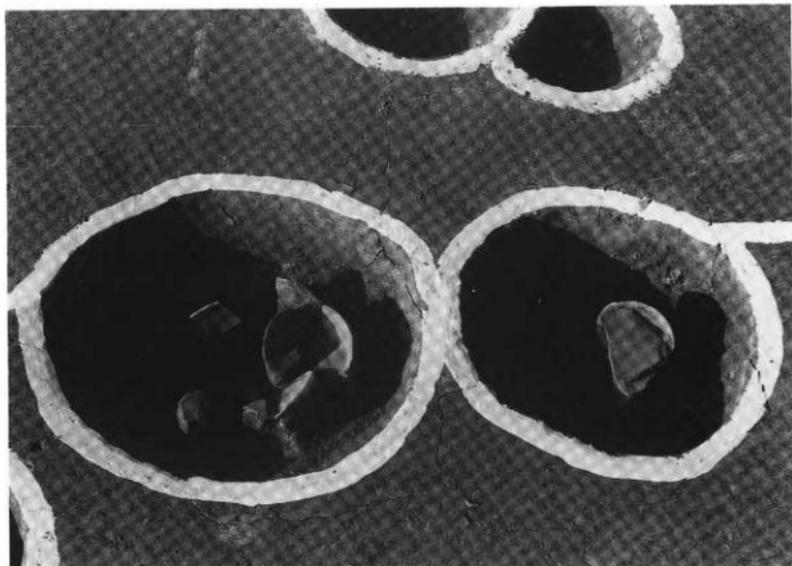
SD-05遺物出土状況（北から）



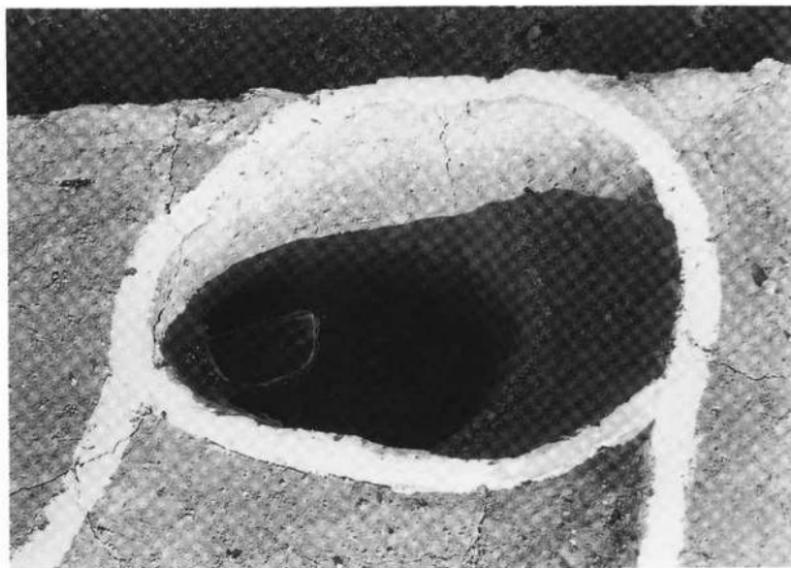
SP-16、SP-17、SP-18遺物出土状況（南から）



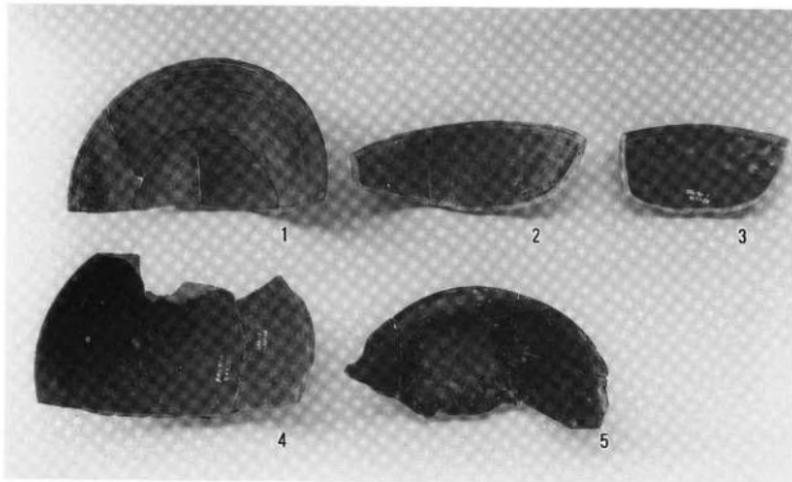
SP-16遺物出土状況（北から）



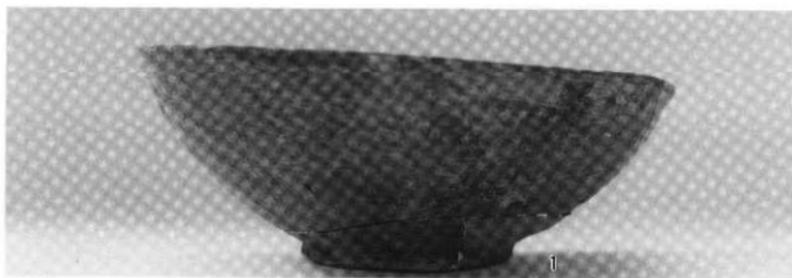
SP-16、SP-17遺物出土状況 (南から)



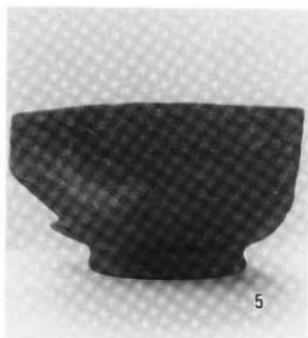
SP-20瓦器椀出土状況 (西から)



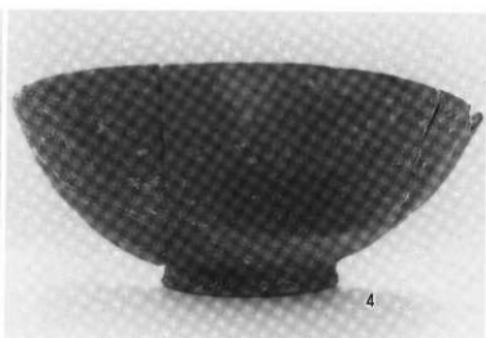
SD-05



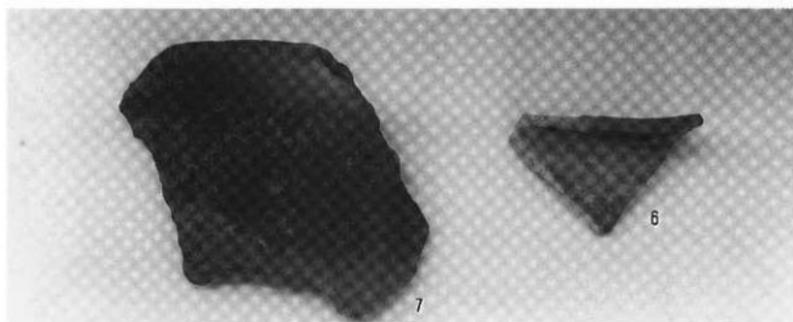
SD-05



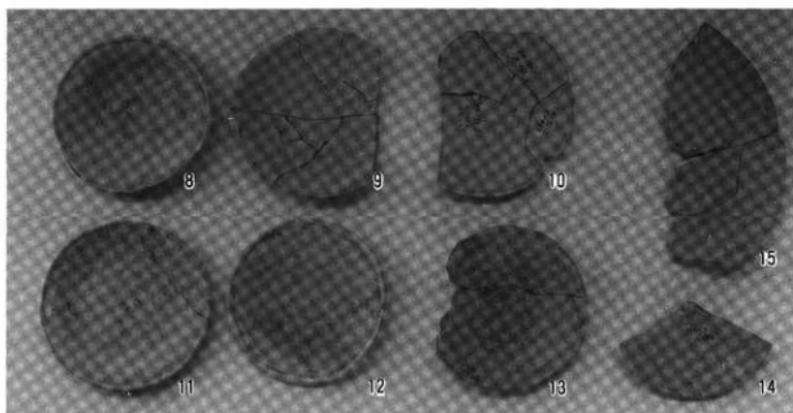
SD-05



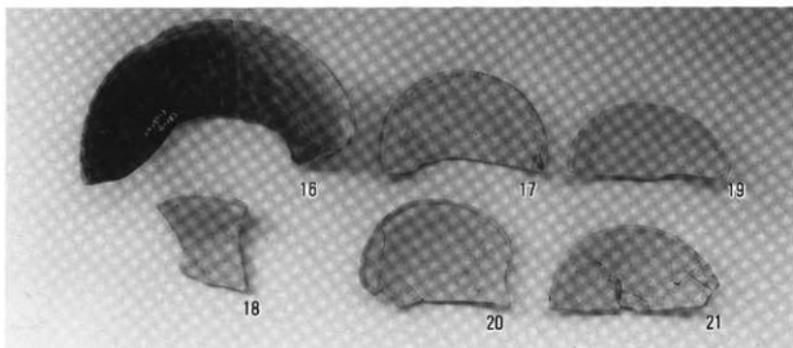
SD-05



SD-05



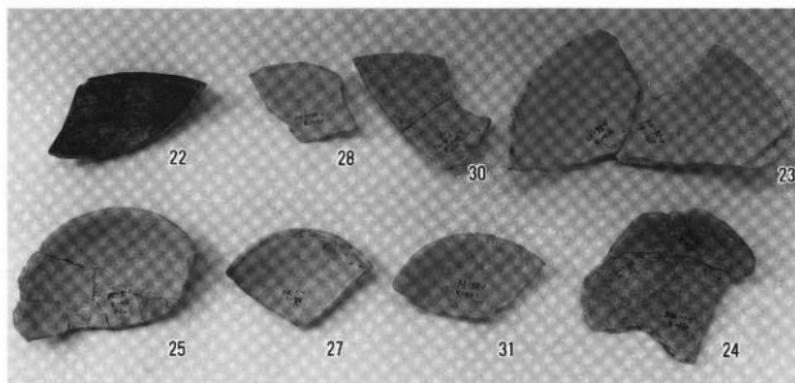
SD-05



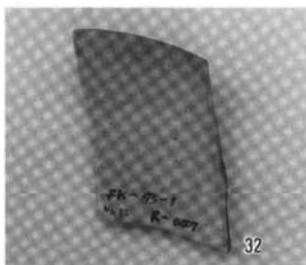
SP-17

舟木遺跡 (FK・95-1)

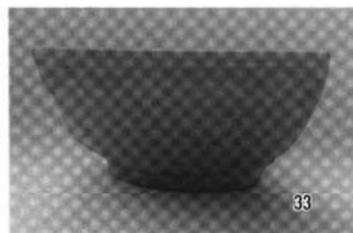
図
版
16



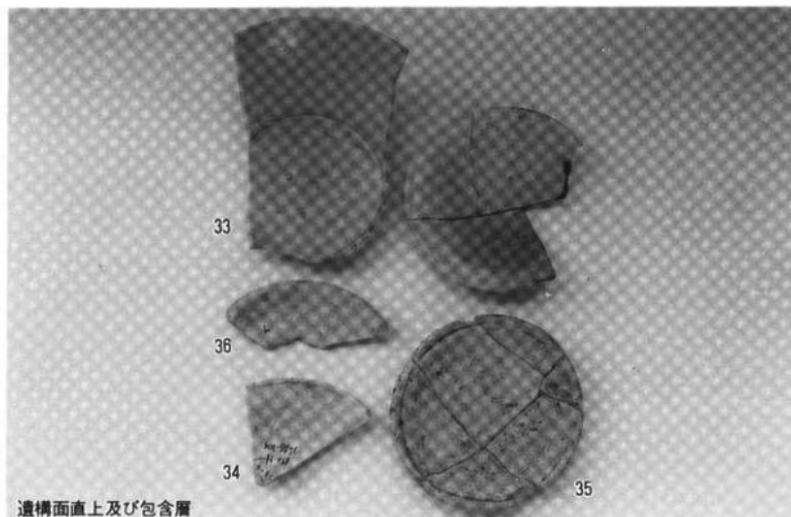
SP-18



SP-19



遺構面直上



遺構面直上及び包含層

舟木遺跡 (FK・95-1) 出土土器-Ⅲ

平成7年度発掘調査概報

発行日 平成8年3月31日

発行 茨木市教育委員会

印刷所 政和印刷株式会社

茨木市郡4-1-4

Tel 0726-43-5457